
Red fraction

藤ノ宮 空雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e d f r a c t i o n

【Nコード】

N 7 2 9 0 P

【作者名】

藤ノ宮 空雅

【あらすじ】

5年前、悪友・慧の麻薬売買に巻き込まれて、背中に望まぬ刺青を彫られた深見。助け出された後に待ち受けていたのは慧の死と広域指定暴力団・東郷会への誘いだった。一介の雀士であることを望みながらも、娘と自身の安全の為に組に順ずる日々。そんなある日、ひよんなことから関東裏社会を揺るがす大事件に巻き込まれてしまう…。

R e d f r a c t i o n 0 0 (前書き)

！警告！

この作品はB L & R 1 5の性描写を含みます。嫌悪感を抱かれる方はお読みにならないようお願いします。

プロローグ

両手に手枷。冷えた空気。敷かれたシートには赤と黒。

深見は簡易なパイプベットに両腕を括りつけられて、うつ伏せに寝かされている。

ただ捕らわれただけの身の上ではない。深見の姿は一糸纏わぬ裸体である。そのうえ背中にひどい痛みを抱えていた。

サク、サク、と雨音に混じって音が鳴る。

「いてえ…」

呻きを上げようと返事は返らない。

「何が、楽しくて、こんなこと、してんだ…」

眉を寄せ、途切れ途切れに問いかけても。

「なんで、俺が、こんな目に遭わなきゃなんねんだ…！」

歯噛みして、訴えようと止まらない。

刻み付けられる　消えない、傷跡。

背後の男は深見の背中に刺青を彫っている。

頼んだわけじゃない。望まぬ所業だ。何の絵柄が描かれているのかさえ深見は知らされていない。

原因はヤクザ。そしてヤクザを怒らせた悪友。

男はヤクザに大金を支払い、処分されるはずだった深見の身柄を買った。毎日、何時間にも渡って刺青を彫り　気まぐれに身体を抱く。

吐き気をもよおすほどの不快な行為だが逆らうことはできない。腕を拘束されていることだけでなく、男は深見の娘を人質に取っているのだ。

「ああ、なんや…ええ時間やな」

男はコキリ、と首を鳴らして針を置いた。血と墨で黒ずんだ手ぬぐいを床に投げ捨ててフラリと隣室へ姿を消す。

（やっと解放された…）

深見はぐつたりと身体力を抜いた。何時間、彫られていたのか…腕を括る縄にぶら下げられた銀色の腕時計に目をやるが、そもそも開始時刻を覚えていない。

ここへつれて来られてからの日数も不明瞭であった。

部屋の窓はカーテンに覆われていて明かりが射さず、尚且つ、深見自身の意識も途切れ途切れなのだ。

「自分、そのまま寝たらアカンで。風呂入り」

いつの間にか部屋に戻ってきた男が湿気で膨らんだ深見の金髪をポフポフと叩く。

だが、もはや顔を上げる気力すらない。気だるく、重たくて指1本動かせない。背中痛みだけでなく体内に倦む熱も身体を蝕んでいる。

刺青は肌を傷つけるから、と言っていたか。負傷した時と同じ症状で微熱を発しているらしい。

無言のまま、腕に抱えた枕へと顔を伏せていたら、男は再び隣室へと向かい　すぐに戻ってきた。

ヒヤリ、とした何かが背中に触れる。その温度は男の手と同じで反射的に身体が強張った。

（まだやる気か！？）

ぞつと寒気が沸き立つ。この男は思考だけでなく性欲も狂っている。男にしか興味がないというのもそうだし、分量も尽きることを知らない。

刺青を彫る前にも散々犯された。だから背中だけでなく腰も痛い。掻き回された腹の中も気持ち悪い。これ以上されたら口から内蔵が飛び出る。

「っ、触んな！」

叫んで、男から距離を置こうと身を擦る。しかし括りつけられた縄が手首に食い込むだけでろくな抵抗にならない。むしろ新たな痛みが加わって眉を寄せた。散々抗ったせいで深見の手首には擦り傷が幾重にも重なっている。

「くそつ、いてえ！死ね…っんぐ！？」

「おとなしいしときで。身体、拭いたつとんねん」

間延びした声とは裏腹に乱暴な手つきで頭を押さえられた。鼻も口も枕に塞がれて息苦しい。

ジタバタと足掻いて頭の中で吠える。

（離れる、離せ、苦しい、酸欠で吐きそうだ、このまま吐いたら死ぬ、死んだらどうすんだ！死んでもいいと思つてやがんのか！）

足をばたつかせて白い布団を蹴りつける。ギシギシとベッドが軋みを上げる。

それでも男は手を離さない。深見の頭を枕に押し付けたまま、固く絞った布のような物で背中を擦っている。

どうやら汚れを拭っているらしい。数回に渡って擦られて　突然、焼けるような痛みが広がった。

「…っ！………っ！！」

消毒液でもつけたのか。今までとは種類の違う、焼けるような痛みに涙が滲む。

深見は縛られた両腕で拳を握り、布団を叩いた。

（いてえ、いてえ、マジでいてえ！なんで俺がこんな目に遭わなきゃなんねえんだ！見捨てやがったスーのせいだ！アイツはそういうヤツだ、よし殴る！）

諸悪の根源である悪友の、好青年じみた爽やかな笑みを思い返して即決した。八つ当たりではない。根源と断定できる証拠がある。まずヤクザが深見を捕らえた理由。これは彗スイの悪行に端を発している。なんでも彗はヤクザに内緒で麻薬を売り捌いていたらしい。

中学からの腐れ縁で深見と彗の仲は悪くも良い。深見は昔から彗に金を無心し続けている。20を超えた今でも遊びの金まで彗の世

話になっていた。娘の世話も彗に任せつきりだ。

ゆえに深見は彗の情夫だという噂が常々流れていた。同じチームの幹部を務めていたことも災いと呼んだのだろう。麻薬売買にも関わっていると思われるしまった。

そして無実と知れた後もヤクザたちは深見を利用しようとした。人質として捕らえ「期限までに姿を見せなければ旦那を殺す」と噂を振り撒き、彗をおびき出そうとしたのだ。

バカである。深見と彗はそういう関係ではない。そもそも山崎彗という男がどれだけ外道かを理解していない。彗の腹の内は腐っている。我が身に危険が及ぶとなれば恋人だろうが友人だろうが親兄弟であろうが笑顔で見捨てる。

そんな彗であるから当然、期日までに姿を見せなかった。助けようという動きも見えなかったらしい。深見を捕らえていたヤクザは哀れみの目を向けてきたが、深見は既に予測済みであつたので「ほれみろ」と鼻で笑ってやった。ヤケを起こしたのではなく、生き長らえるための勝算があつたのだ。

深見自身が持つ麻雀の腕と、生前、名の通つた博打打ちであつた父の存在である。

父はヤクザではなかったが、職が職であるがゆえにヤクザと関わりが深かった。特に父と関係の深かつた人物　鬼仏と呼ばれるヤクザ者は、今や関東一円の極道が名を連ねる親睦団体？関東総和会？のトップにまで上り詰めているらしい。

親の威光を借りねばならないことにプライドは幾分か傷ついたが命には代えられない。

「丁寧に扱いやがれ。俺は？東の昇竜？の息子だ」

言つた瞬間、深見を捕らえていた、一見ヤクザに見えないビジュアル系の格好をしたイケメンヤクザの顔が固まつた。

「…昇竜で、あの昇竜さん？チンマイ感じの？」

どうやら面識があつたらしい。仏頂面でコクリと頷いた深見に対して、イケメンヤクザは「お父さあぁん」と叫びながら頭を抱えて

仰け反った。

そうして深見は九死に一生を得た。だがしばらく監禁状態は続いた。イケメンヤクザのお父さん　組長からの命令だ。鬼仏の耳に入らないよう根回しでもしているのか、と思っていたのだが：思ったほど上手く事は運ばなかった。

件の刺青男が現れたせいで。

「一応、完成やな」

男は一頻り深見の背中を弄った後、両手を離して満足げな声を発した。そして背中だけでなくローションや精液で汚れた深見の下肢も拭い、下着とジーンズを穿かせてベッドから立ち上がる。

どうやらこれ以上、やられることはないらしい。深見は枕から顔を上げて男を睨みつけた。

男はベッドサイドに立つて腕を組み、うつ伏せのまま転がる深見を見下ろして、にんまりと頬を緩めていた。

「似合うやん。見立てどおりやな」

どうやら刺青のことを言っているらしい。背中へ新たに押し付けられた冷えた感触　男の冷たい指先が刻まれた絵柄を撫でている。ぞわりと寒気が走った。

身を振り、ギリりと三白眼を輝かせながら問う。

「…誰の見立てだってんだ？」

「物好きな誰かや。俺はよう知らんねん。頼まれただけで」

そう言って深見の顔をひよい、と覗きこみ、肩口に黒髪を垂らして耳元に口を近づけてきた。

「ほな、また：まあ、そやな。ハンパ彫りが嫌やったら来いな。代金は貰つとるし」

別れ文句のような言葉に深見はうろたえた。

だっていきなりだ。何の兆候もなく男は立ち去ろうとしている。いや、立ち去ってくれるのは願ってもない事だが手枷が未だに外されていない。

「おい、待て！これ外してから行け！」

叫びも虚しく男は踵を返した。1つに括った長い黒髪を丸めた背中の上で陽気に揺らして　　どんどん遠ざかっていく。

「くそつ、聞こえねえのか！待てつつてんだろ！！」

必死にもがき、ピントのぼやける景色を留めようと試みる。

だが瞼が重い。意識を失いかけているのだ。

（いやだ、やめろ、落ちるな……！！）

白い。何もかも塗りつぶす白い光に目が眩む。

フワリと体が浮く感覚。誰かが名前を呼んでいる。

「…キ、アキ、起きろ」

聞き覚えのある声だ。起きなければならぬ。

けれど、起きたくない。

だって目覚めた後に待ち受けているのは

絶望的に嫌な夢を見た。過ちだらけの人生だが、その中でも最大級の汚点。思い出すだけでも冷や汗がただ漏れる。抹消したい過去リスト、不動の一位を誇る記憶。

夢じゃなく記憶である。つまり、実際に遭遇した出来事なのがおぞましい。

「しかも無駄に鮮明だしよ……」

額に張り付く染め上げた茶色と金の髪をかき上げて深見は体を起こした。あんな夢を見た後でもしっかり朝勃ちしている自分のムスコを恨めしげに見下ろしつつ、ベッドサイドの棚の上にある煙草へ手を伸ばす。

取り出した1本に火を点し、深く吸い込んで薄く白い煙を吐き出しながら左腕の時計を確認すれば、

「…11時かよ」

深見はむつつりと眉間に皺を寄せた。

生業にしている麻雀の代打ち業を終えて、帰宅したのが朝の5時。風呂に入り、所用を済ませて寢床に就いたのは9時過ぎだ。2時間程度しか寝ていないのに随分あっさりと目が覚めてしまった。きつとあんな夢を見たせいだ。

原因と思われる雨音に気づき、薄明かりの漏れるカーテンへと視線をやる。雨は寝る前から降っていた。降り出したのが帰宅直後であつたことが唯一の救いだろうか。

中学を卒業してから深見の交通手段はもっぱらバイクだ。前夜もバイクで外出していた。ただでさえ寒い真冬の明朝に氷雨に打たれながら走ればたちどころに凍える。

深見はしばらくの間、カーテンを睨みつけ　首をコキリと鳴ら

しながら立ち上がり、寝室のドアを開けた。

あんな夢を見た後で二度寝したらもつと酷い悪夢を見そうな気がする。コーヒーでも飲んで気分を入れ替えようと台所へ向かった。

東京・渋谷の繁華街に程近いマンションの一室。あの悪夢の出来事から5年の月日が流れて、深見は娘と共にこの部屋で暮らしている。

男が立ち去った後、熱と疲れで意識を失った深見は、その日のうちに助け出された。目を開けたのは病院。といっても正規の病院ではなく、父の死後、身寄りのなかった深見の面倒を引き受けてくれていた鳴美が営む、闇病院のベッドの上であつた。

「アキ、もう大丈夫だ。遥も無事に戻ってきた」

涙ながらに覗き込む鳴美の傍らに珍しい人物がいた。

鳴美の友人にして彗の保護者。東郷会という暴力団に所属しているヤクザ者。

「フェイは死んだ。俺が殺した」

郷田は深見を見下ろして唐突に告げた。

フェイ 一体、誰のことを言っているのか。

思い出す間もなく低い声が降る。

「おめえの選択肢は二つだ。このままカタギに戻るか、俺の下で代打ちとして働くか」

その時、郷田がどんな表情をしていたか、自分が何を思ったのか。何もかも真っ白で覚えていない。怒りも、悲しみも、感じる間を与えられずに決断を迫られた。

「背中にえらいもん背負わされてんだ。ウチに来い」

強引な誘い文句に声もなく頷いた。

現実味がなかったのだ。

よりもよって、郷田がフェイ 彗を殺すなど。

（未だに信じられねえ）

台所に立ち、フィルターを張ったドリツパーの中に目分量でコーヒーの粉を放り込みながら当時の状況を思い返す。

聞くとところによると、彗は全ての責任を放棄して国外逃亡を図ろうとしていたのだという。引き止めようと港に駆けつけた郷田に対して手勢の者をけしかけ、説得に応じることもなく発砲し、遂には逃げ切れぬと悟ったのか、用意していた偽装漁船に自ら火を放って焼け死んだらしい。

どこぞの少年マンガの悪のヒーロー、もしくはハリウッド映画のラストシーンのような壮絶な死に様だ。だからこそ深見は納得しきれていなかった。

あの彗がそんな潔い死に方をするとは思えない。一度恨みを抱けば晴らすずには居れない、諦めの悪い性格なのだ。殺し合いになつたなら、己の息の根が止まる最期の一瞬まで相手を殺そうとするだろう。

それに郷田の行動にも不可解な点がある。

郷田は彗を可愛がっていた。幼い頃、飛行機事故で天涯孤独の身となった彗と郷田の間に血縁関係はないが、実の息子、年の離れた弟、それ以上に大切にしていた。東郷会での立場があるにしても、わざわざ海外逃亡を阻みに行くとは思えない。むしろ逃亡を手伝ってやりそうな間柄だったのだ。

何度思い返してみても違和感を拭えない過去。まるで別人の話を聞いているように感じる。殺し合う2人の姿を想像してみても、シリ阿斯に思い描けたのは燃え盛る漁船だけだった。

（だいたい、発砲するスーが想像できねえ）

発砲どころか走り回るイメージすら持てない。いや、イメージしてみたが数十秒のうちにへばってフラフラになり、ずっとかけて気を失っている間に焼け死んだ。

間抜けな死に様である。実際に死亡届の出ている友人の死に様をそんな風にイメージしてしまうのは我ながらどうかと思うが、それしか湧かないのだから仕方ない。

(50m走んのに17秒掛かんだぞ)

雪平鍋に水を張りながら中学時代の彗の驚異的な記録を思い出して眉を顰める。

演技ではない。あれは本気で走っていた。半分走った時点で長距離ランナーのスピードになり、残り10mの時点でほとんど歩いていたら、ゴールに辿り着いた時の様相は息も絶え絶え。その場へたり込んで10分ほどマトモな受け答えが出来なかったほどだ。

あんな貧弱な人間がガンアクションを行えるものなのか。

(人違いとか替え玉じゃねえのか……?)

ここ5年、一度も姿を見せない彗の作り物じみた笑顔を思い出しつつ、水を張った鍋をコンロに掛ける。

と、ダイニングテーブルの上に置きっぱなしにしていた携帯から世にも奇妙な物語のテーマが流れ出した。

「俺は寝てる。留守電に入れる」

着信ランプを睨みつけながら、搾り出すような声音で呟く。

固定着信音のおかげで画面を見ずとも誰からの電話か、わかってしまった。あの悪夢といい、部屋干しの洗濯物といい、今日は厄日なのかもしれない。

思えば前夜から不運に見舞われている。仕事の呼び出しを受けたのは日付の変わった午前2時だ。その筋では有名な？狂犬？の名を指名してケンカを売りに来たというから渋々応じてやったというのに、卓を囲んでみれば金を持っているだけの三下。深見が到着してからほんの1時間で破産して場に立ち会っていた組員から金を借りた挙句、下手くそなイカサマまで使い出すザコだった。

あまりの怒りに一切の手加減なしで追い込んだが、終了後、組員に連行されていく姿を見て「我ながら鬼の所業だったな」と少しばかり反省した。だからこの電話に出たくないし、出なくてもいいだろう。

一方的に判断をつけて、ようやく留守電に切り替わった携帯を取り上げる。画面には予想どおりの人物の名が記されている。だが留

守電に伝言を残すつもりはないらしい。

一度切れて、すぐさまリピート再生し始めた世にも奇妙な物語のテーマに深見は眉間の皺を深くした。

白く発光する画面に記されている名前は？豊能 貞清？。広域指定暴力団・東郷会の直参幹部で直系の二次団体・紅貞組の組長だ。いかにも頭の悪そうな赤頭に皺のないツルツルの脳みそを詰め込んでいるバカ猿だが、その単純さゆえに同じようなチンピラ、特に若い連中から慕われており、4年前、22という若さで自らの名を冠した組を立ち上げた。

深見は現在、この紅貞組に所属している。そして雀士以外にもう1つ、非常にありがたいたくない役割を負っている。求心力は絶大だが如何せん頭が足らなすぎる貞清の補佐役 若頭という要職を任されているのだ。

深見に貞清を尊敬する気持ちは微塵もない。貞清と深見、彗も加えて3人揃って同い年、同じ中学出身の腐れ縁だ。深見と貞清は昔から互いの仇名どおり、犬猿の仲と呼ぶに相応しい関係を築き上げているし、そもそも深見が郷田から引き受けたのは代打ち業のみ。

それなのに何故、こんな立場に置かれてしまったのか。

それは貞清が深見や彗と同じチーム レッド・シップのリーダーだったからだ。紅貞組の面々もほとんどがレッド・シップ出身の顔見知りばかり。組員たちは貞清の無鉄砲さをよく理解している。「ストッパーになつてくれ」と縋られて渋々引き受けてしまい、今では雀士としてよりもヤクザとしての業務に多大な時間を割いている。

「出たくねえ、つってんだろ」

ダイニングテーブルの上に携帯を投げ捨てて、代わりに寝室から同行させたロングピースを拾う。ソフトパッケージを軽く上下に振って飛び出した一本を咥えながら、再度低い声で唸った。

おそらくこの電話の用件は？昨日のザコをどう処分するか？。どうするも何も金が払えないのなら本人を売り飛ばしてしまえと思う

のだが、売り飛ばす為の下準備をするのは深見自身だ。自らの手で追い込んだ人間が内臓を取られに行くところを見送って、何の罪悪感も抱かずにいられるほど摩れ切った心は持ち合わせていない。レッド・シップ時代もそういう仕事は全て慧の役目だった。

留守電に繋がった携帯がもう一度ブツリと鳴り止む。だが貞清はどうしても直接話がしたいらしい。三度鳴り出した携帯に観念して、苛立ちながら通話ボタンを押した。

「朝っぱらから何の用だ？」

開口一番、貞清が何か言う前に先制した。

ちっ、ちっ、ちっ、と連続して舌を鳴らす音が耳に伝わる。

『用もなしにテメエの声なんざ聞きたかねえ。用があっても聞きたかねえが』

努めて平坦な口調を装ってケンカ腰の返答が返された。怒りを抑えようと試みたものの耐え切れずに漏れ出したらしい。舌を鳴らすのは苛立っている時の癖だ。

ちっ、ちっ、と続く舌打ちに不快感を募らせて、新しく啜えた煙草のフィルターを噛み潰す。

「俺も同感だ。メールにしとけ」

『テメエの脳みそは学習しねえのか』

「ああ？」

『思い返してみろ。今までメールのみで話が終わったことがあるか？絶対に途中で電話してるだろ。だったら最初っから電話した方が話が早えじゃねえか』

揚げ足を取ったつもりでいるのか勝ち誇った口調で、さも自分が正論をのたまっているかのように告げられて、危うく堪忍袋の尾が千切れかける。

メールで話が終わらないのは貞清が送ってくる最初のメール、用件の後に一言二言、深見の逆鱗に触れるような言葉が添付されているせいだ。文句を返しているうちにメールを打つ手間自体に苛立ち、結果的に電話を掛ける羽目になる。

「てめえこそ脳みそ入ってんのか？簡潔に用件だけ伝えりや丸く収まんだよ。余計な一言を省け」

『できるならやれ。テメエが先に実践しろ』

「そっくりそのまま同じ言葉を返してやる。最初の一言は毎回てめえからスタートしてんだ。毎度毎度、ろくな食いつかねえくせにグチばっか吐き出しやがって」

『うるせえよ、腑抜けガシラ。本家の厭味を一手に引き受けてるオレの気持ちを理解しろ』

「じゃあ、てめえは無能無組長の尻拭いを押し付けられてる俺の気持ちを押し量れ」

グツグツと沸き立つ鍋の中の湯を見下ろしてガスの火を止める。腹の中で沸き立つ怒りも視覚効果で収まるのではないかと、かすかな望みを抱いていたがまったく効果がなかった。

眉間に深い皺を刻みつつ雪平鍋を持ち上げて、マグカップの上にセツトしておいたドリッパーに湯を注ぐ。

フワリといい香りが立ち上ってきた。スーパーで安売りされていたお徳用詰め替えパックだが味の期待はできそうだ。さっさと通話を終わらせて、のんびりと朝の一杯を堪能したい。

そんな深見の心中を逆の意味で押し量ったのか、なおも舌打ちは鳴り止まない。

『ちっ、ちっ…尻拭い、尻拭いな。だいたいオレらの存在自体が全部尻拭いじゃねえかよ。あの根腐れ野郎のせいで尻拭い人生…あー、マジで殴りてえ。今すぐ殴りに行きてえ…なっ！』

舌打ちが途絶えると共にパンツ、と硬い物を殴りつけるような音が耳に届いた。間を空けずにガシャン、と鉄製の音が続く。おそらく事務所に常設してあるサンドバッグを殴り飛ばした音だろう。

貞清はプロボクサーという過去を持っており、今でもハードなトレーニングを続けている。さぞかしプロの道に未練があるのだろうと思われがちだが、本人はきっちり気持ちにケリをつけていてライセンズ剥奪の通知を受けた時も「元々向いてなかった」の一言で終

わらせた。

もしも続けていればチャンピオンベルトの1本くらい簡単に獲得できただろうな、と柄にもなく哀れむような考えが浮かんで、なおさら気分が悪くなった。おそらく例の悪夢と、貞清が持ち出した？根腐れ野郎？のせいで思考回路が狂わされているのだろう。この世から失せても人を惑わし続ける彗は存在からしてペテン師だ。

「殴りに行けよ。俺の分も殴っとけ」

噛みすぎて、フィルターがぐしゃぐしゃになった煙草を洗い場の三角コーナーに吐き捨てる。

「……そりゃオレに昇天しろ、つつてんのか？」

「めでてえ野郎だな。アイツが天に召されると思ってたのか」

「そりゃそうだ……って、オレも地獄に落ちろってことかよ」

「いいからさっさと用件を言え」

サンドバッグを殴ったことで気が晴れたのか、貞清の声は幾分か落ち着いていた。これならマトモに会話できそうだと話を元に戻してマグカップからドリツパーを外す。

洗うのは後回しにすることを決めてドリツパーを流しに転がした後、換気扇のスイッチを入れて新たに啞え直した煙草へ火を点した。

気分が落ち着いたのは、ほんの数秒の間だけだった。

「デメエ、昨日イカサマしたか？」

唐突に告げられた一言で腹の中が再沸騰した。先ほどよりも温度が高い。完全に沸き立って勢いよく気泡を吐き出している。

「てめえはよつぽど死にてえらしいな……」

深見はシンクに凭れかかり、吸い上げた煙を鼻から吐き出しながら、怒りに満ち満ちた低い声で答えを返した。

イカサマなどするはずがない。昨日のザコはザコである。出向いたことを後悔するほどのザコだ。ザコすぎて逆にイカサマの使用を見逃してやつたくらいのザコ。

それでなくても、相手が相当の打ち手であったとしても、深見は

イカサマなんぞ使わない。組所属の代打ちになっても深見の職業意識はあくまで雀士だ。

雀士がイカサマを使うというのは、歌手が口パクでステージに上がっているのと同じようなものである。そんな恥を晒すぐらいなら指を全部落とした方がマシだ。

受話器越しに気迫が伝わったのか、貞清は舌打ちを鳴らすことなく面倒そうに訳を説明し始めた。

『俺が疑ったわけじゃねえ。立ち会ってたヤツらもテメエの圧勝だったつつてる。けど相手がな…』

「ハッ！負け惜しみだろ」

煙草を指で挟み、ボロボロになったフィルターを口から離して一蹴した。怒りに駆られすぎて逆に口角が釣りあがる。

「いつものことじゃねえか。なんで本気にしてんだ。ついに頭が腐ったか？スーの墓暴いて頭蓋骨だけでも取り替えてこい」

拳を握り締めて一息に吐いた。怒りの沸点は超えているが冷静さは失っていない。煽るような挑発、紛うことなくケン力を売っている。死んだ人間さえも貶める下劣な発言とて、わざとだ。？根腐れ野郎？と呼んでいても貞清と替の仲は深見と2人の仲より数十倍、良好だった。

てつきりすぐさま舌打ちが聞こえ出すと思いきや、

『俺は疑ってねえつつつてんだろ。疑ってんのは相手の上だ』

貞清は面倒そうな、気だるそうな声で否定した。

意外な反応に怒りに染まっていた頭が冷静さを取り戻す。

「…上？」

『昨日の相手、アイツは関西の…なんつつたか、なんちゃら組の若頭らしくてな。西じゃ相当、有名な打ち手なんだと』

「…パチこいてんじゃねえのか？」

深見は昨日の勝負を思い返しながら首を捻った。

相手の男の名は…伊達と言ったか。40前後のヒョロリとした貧相な男で言葉遣いは確かに関西弁だった。

しかし思い返してみても弱かった。一時間で一千万、組員から五百万借りて更に一時間。わずか二時間あまりの短い間に一千五百万の大金を撒き散らしていったのだ。あの腕では素人相手にも五分の勝負、といったところだろう。

だが貞清はとんでもないことを言い出した。

『パチじゃねえから親父が襲撃に遭った』

「…あ？」

『イカサマだ、ウチの若頭を返せつつってソイツの上役：なんちゃら組の組長が俺んちの庭先で暴れまわった』

突拍子のない発言にあんぐりと口を開けた。吸い込んだばかりの煙が肺に至らず吐き出されて、間の抜けた表情を浮かべた顔の周りに漂う。

貞清の父親は総和会 関東ヤクザの親睦団体の代表だ。10日ほど前、1月の末に今まで代表の座にあった鬼仏が死んで、後任を務め始めた。

そして総和会代表になるまでは東郷会3代会長を務めていた。総和会代表の座に就くと同時に3代目を辞して、ゆえに東郷会内部でも大規模な人事異動が行われた。

4代目に選ばれたのは郷田だ。これはかなり異例な人事だった。郷田は7年ほど前、東郷会に所属したばかり。幹部の中ではまだまだ新参者に分類される。よって実力はあれども古参の幹部連中は納得できていない。

だから貞清は厭味を言われる。貞清が郷田に心酔しているからだ。父親に口を利いてやったのではないかと…。

ツラツラと情報だけが頭に流れた。情報に対する感想は湧いてこない。あまりの大きな展開についていけない。

「…もつと詳しく話せ」

目頭をきつく押さえて深見は話を促した。心の中で性質の悪い冗談だ、すぐにボロが出る、と思いながら。

『いいぜ。朝っぱら10時キツカリだ。そのなんちゃら組の組長と

葛葉のハゲが玄関に現れた。俺んちではめえも知つてのとおり、ちよつとした豪邸だ。家のことやってくれる親父の子飼、東郷傘下の豊能組から出向してる組員が常時20人は詰めてる。それが、一人残らず、全滅だ。全員殺された」

冗談を言っているのではなさそうな押し殺した声音に、こめかみと掌からジワリと嫌な汗が滲む。

「それで、てめえの親父さんは無事なのか？」

思うところは他にも多々あれど、ひとまず問いかけた。

「親父はな。けど、お袋が人質に取られてる」

「人質？」

「やつらの目的は関東との話し合いなんだと。今、4代目が総和会の幹部に声掛けて回ってる。俺は事務所で待機してろって言われた。テメエもすぐに事務所に来い」

人事のように告げる貞清の声音は冷静だ。だが怒りを感じていないわけではないのだろう。了承の返事を返して通話を終える直前、再びサンドバッグを殴る音がした。

紅貞組の事務所は深見が暮らしているマンションから徒歩10分の場所にある。それなりに人通りの多い商店街のアーケードを進み、パチンコ屋の隣の細い路地に入って外付けの非常階段を上がった3階、同じく鉄製の扉を押し開けて中に入れば、15名ほどの組員が一斉に振り返った。

皆、入り口から距離をおいた場所で各々武器を手にして強張った面持ちを晒していた。壁際に立ち金属バッドを構えた者、包丁を手にもしやがみこんでいる者：ソファアーに座っている4名は深見へ黒い拳銃を向けている。

事情を知らされて怯えているらしい。それはそうだろう、本来なら当事者である紅貞組が真つ先に狙われるはずなのだ。

「き、狂犬さん：脅かさないで下さい」

ソファアーに腰掛けていた坂本が手にしていた拳銃をガラステーブルの上に置いて立ち上がった。

「…ソレ、本物か？」

深見はテーブルの上を顎でしゃくって問いかけた。

近寄ってきた坂本がコクリと頷き、床に視線を落としながら顔を歪める。

「昔、ザキさんにもらったんすよ。なんかあった時、貞清さんを守れるようにって…あん時は守れなかったすけど、今回は守ってみせます」

言って顔を上げ、今度は決意の表情を露にしてトンと己の胸を叩く坂本を見て　深見は複雑な思いを抱いた。

5年前、彗がやかしていた麻薬売買の裏に中国マフィアの影が

あり、関東制圧のために葛葉会という暴力団と手を組んでいた。

ところが中国マフィアは突如として葛葉会を襲撃した。荷物を卸したのに金を払わなかったことが争いの原因だったそう。だが葛葉会は仲介役であった彗にキチンと金を払ったという。

どうやら彗が売上げを持ち逃げしたらしい、と各々血眼になって彗を探し回った。

そうして深見が捕まっている間に貞清は死にかけた。深見と同じく、レッド・シップの繋がりから彗の一味だと思われて葛葉会からの報復を受けたのだ。

貞清は銃で撃たれて意識不明の重体、どうにか命は取り留めたものの、元々ヤクザの息子ということもあり、不祥事を招きかねないとボクサーライセンスを剥奪されてしまった。

（俺も貞清も知らねえうちに巻き込まれた。けど…）

坂本の、どこか後ろめたさのある表情。

何かあった時、守れるように拳銃を貰う…ヤクザでもないただのチーマーが、どんな状況を想定して受け取ったのか。

（他のヤツらは知ってた）

彗が麻薬売買を行っていたことを。

何故、黙っていたのか。

（他のヤツらもヤクを捌いてたからだ）

直接、問い質したわけではない。だが深見や貞清に言わなかったこと、晩年のレッド・シップの増員率を考えるとそうと思えな。第一、金に執着心を抱かない彗が売上げを持ち逃げするなどという馬鹿げた行動を取るはずがないのだ。

おそらく誰かが彗の名前を騙った。そして組員たちはそのことを知っている。自分たちの代わりに彗だけが死んだ　後ろめたい気持ちにはあれども藪をつつけば蛇が出る。

だから組員たちは滅多に彗の話を持ち出そうとしない。

深見が事務所の奥へと続くドアを開けた時、貞清は冬場だという

のに汗だくになってサンドバッグを殴り倒していた。

どうやら深見との通話を終えた後、ブチ切れたらしい。

「あんの生臭坊主…マジで殺りに行きてえ」

ドアが開いた音で振り返り、ソファアの上に置いてあったタオルで汗を拭いながら近付いてきた貞清に、隣の部屋の冷蔵庫から持ってきたスポードリンクを手渡してやる。

貞清はひったくるようにしてペットボトルをもぎ取り、一息に半分近くまで飲み干した後、口を拭って、10センチほど高い位置にある深見の顔を睨み上げた。

「なんで天罰下らねえんだ？」

「神仏の心も金で買える時代になってんだ」

「あんなのに経上げられても成仏できねえ」

「だったら天罰より崇られる方が早えな」

「幽霊は信じねえ主義だ」

「じゃあ今度、呪いのビデオ借りてきてやつから見ろ」

「死なすぞ」

「てめえが死ね。呪われて死ね」

ギラギラと鋭い視線を交わしながら部屋の中央へ移動して、テーブルを挟んで向き合わせになっているソファアへ互いに腰掛けた。

どちらも軽口を叩きあうにしては険しすぎる表情だ。貞清は舌打ちを鳴らし続けているし、深見は移動しながら取り出した煙草に齒を立てている。

だが、いつものように口論をしている場合ではないことはお互いに嫌というほどわかつている。

5年前、貞清を襲った葛葉会。

今回、貞清の父親を襲ったのも同じ、葛葉の破戒僧だ。

何故、破戒僧なのか。言葉のままである。葛葉会のトップは黒い着物に袈裟を掛けて頭を丸めた寺の住職なのだ。

葛葉会はヤクザだが暴力団として登録されていない。5年前の一件で解散し、すぐさま宗教団体へと転身した。

だが実態はヤクザ以上にあくどい手法で信者から金を巻き上げる、れっきとした犯罪集団である。横浜に本拠地を置き、1年ほど前から品川にまで手を伸ばして、ここ半年に至っては紅貞組のシマである渋谷にも手出ししてくる始末だ。

そんなこんなで葛葉会は紅貞組の天敵である。深見は緊張感の漲っていた隣室の様子を思い返して苛立つ気持ちを押さえ込んだ。ロングコートの内ポケットから銀色のジッポを取り出して銜えた煙草に火を点ける。

「隣がひでえことになってんぞ。坂本が拳銃持ち出した」

「ああ？どつから持ってきてやった？」

「昔、スーに貰ったらしい」

「…アイツの交友関係はどうなってんだ」

貞清は膝の上に肘をついて額を押さえた。赤く染めた5分刈りの頭から湯気が立ち上っている。暖房の入っていない部屋の中は外と同じくらいに寒い。

「んなもん知るか。とにかく隣に一声かけろ」

言って立ち上がり、壁に設置してある空調のコントロールパネルを操作した。貞清も立ち上がって、深見とは逆方向のドアの向こうへと姿を消す。

こういう役目は貞清に任すに限る。思ったとおり、最初はボソボソと沈んだ声が聞こえていたが、しばらく待てば笑い声まで上がるようになった。

（王様の才能か）

ソファーに凭れて煙を燻らせながら、ふと思い出す。

慧が言った言葉だ。人の上に立つ人間には生まれ持った才能があるのだと。だから自分は上に立たないのだと。

「2番目が好きなんだ」

そう言って矢面に立とうとしなかった。

保身ゆえだと思っていたのに一番、割を食ったのは慧だ。

「…2番目より独りの方がよかったんじゃないのか？」

上を向いて蛍光灯の光に目を細める。天井に取り付けられた空調が吐き出した煙と言葉を散らしていく。

「何浸つてやがる。似合つてねえからやめとけ」

嫌悪に満ちた声に目をやれば、声どおりの表情を浮かべた貞清が隣室から戻ってきたところだった。後ろ手にドアを閉めて壁に引っ掛けてあつたパーカーを羽織り、スタスタとサンダルを鳴らしてソファーに腰掛ける。

実家襲撃の連絡を受けて自宅から飛び出したのだらう。貞清は寝巻き同然の格好をしていた。だが普段もこんなものだ。肩が凝るし似合わない、と滅多にスーツを着ない。

対する深見は電話を受けた後、着替えてから家を出た。いつもどおりにYシャツとスラックス、上着代わりの黒いロングコート。ネクタイは締めていないしジャケットも着ていないが一応、スーツ姿と呼べる格好だ。けれど髪は金と茶に染め上げているし、目つきも悪いので決してカタギには見えない。

どちらがヤクザらしいかと比べれば、おそらく深见到軍配が上がるだろう。服装の問題だけでなく元々の外見からしてそうだ。深見は体格こそ平均的だが兎にも角にも人相が悪い。整つてはいるのだが生来の気の短さゆえに常に眉間に皺を寄せており、そうでなくても水商売が似合いそうな、派手な顔立ちをしている。

それに比べて貞清は半眼、深見とは違つて人にぼーとした印象を与える目つきをしており、おまけに身長165センチと小柄でボクサー体型だ。本人も昔から気にしていて、身長のことを弄られる度にケンカを吹っかけていた。

（酒も煙草もやらねえのに伸びなかったからな…）

酒も煙草もやる深見と替にあつさりと追い抜かれていった中学時代の荒れようを思い出しつつ、ソファーから身を起こして足元のテーブルの上の灰皿で煙草を消す。

そうして状況を把握するべく質問を開始した。

「ひとまず昨日のザコだ。今、どこにいる？」

「本家の事務所だ。襲撃の連絡受けた後、すぐに連れていかれた。けど隠す必要はねえらしい。もしも俺らが襲われたら素直に吐いてお引取り願えってよ」

「…そりゃ誰の指示だ？」

「4代目だ。ありがてえよな」

「ありがたくねえ。襲われること前提だろ」

深見は低い声で唸った。貞清は単純に気遣いに感謝しているようだが、深見が郷田の指示から汲み取った意図は別にある。

本家からの増援は当てにならない。4代目襲名の確執で古参の幹部どもが渋る。だから自分の身は自分で守れ　そういうことだ。

かといって上手い手立ては見当たらない。坂本たちが自身で武器を調達してきたことからわかるように紅貞組は荒事向きではないのだ。本家の力なしには太刀打ちできない。だが他に頼れるところがあるか？と問われれば、ないと答えるしかない。

八方塞りの状況をわかっていないのか、貞清は足を組み、両腕をソファアの背もたれに投げ出して呑気に笑う。

「テメエはよお、心配性すぎんだよ。何も外人が襲ってくるわけじゃねえんだ。ここにはいねえって事情説明すりゃ引き下がってくれんだろ？」

「連中が報復も目的にしてたらどうすんだ？つか目的にしてんだろ。話し合いつて言いながら襲撃してんだ」

「勘違いだろ。説得しろよ。俺は真つ当に勝負しましたって」

「余計にキレル。朝っぱらから人んちに押しかけて、20人も惨殺してんだぞ。誰かから吹き込まれたガセネタを頭っから信用しきってんだ」

「誰かって誰だ？」

「多分、葛葉会だ。アイツらは関東勢に恨みを持つてる。俺らのことも排除してえと思ってる。しかも東郷は4代目襲名でぐらついてる。関西の組を利用して東郷に一泡吹かせようって魂胆じゃねえのか？」

深見は前屈みになつて貞清を睨みつけながら、事務所に着くまでの間に立てた仮説を口にした。

関東と関西は互いに非干渉だが、それゆえに仲がいいとは言いがたい。言わば冷戦状態なのだ。一度争いが起これば何らかの形で決着が着くまで互いに引かない。

決着　深見が危惧しているのは正にそれであつた。今、都内のどこかで行われているであろう話し合いの結果がどうなるうとも紅貞組は巻き込まれる。戦争になるうものなら矢面に立たされる羽目に陥る。しかも本家からの支援は仰げない。郷田が古参連中を無理に動かそうものなら今度は逆に東郷内部で亀裂が生じる。

そう説明してやれば、さすがに貞清も呑気な態度を改めた。深見と同じように前屈みになつて力を込めた半眼を向けてくる。

「どうすりゃいい？」

「どうもこうも、探り入れるしかねえだろ。葛葉となんちゃら組：つか、なんちゃらじゃねえ、そこをまず思い出せ」

敵を知らなければ手の打ちようがない。深見は立ち上がってロングコートを脱ぎながら促した。入った当初は寒かった部屋だが今は空調が効いている。着たままで温度に慣れてしまったら今度は帰る時が辛くなる。

ドアの傍に寄り、壁に取り付けられたハンガーフックからハンガーを手にとって脱いだコートを掛ける。

その間、貞清は「あー」だの「うー」だのと唸り、

「組の名前は出てこねえが：組長の仇名は覚えた」

と、頼りにならない返答をよこした。

「てめえ：マジで役に立たねえな……」

ソファアに戻った深見はこめかみを押さえて苦悶した。もはや能無しと罵る気力すら湧かない。

「俺は親父と4代目が話してるのを隣で聞いてただけだ」

貞清は舌打ちも鳴らさずに当然の如く言い訳をした。それを聞いた深見の表情はさらに曇る。

（てめえの親父が郷田のおっさんに事情説明してんのを隣で聞いてたんだろ。だったら途中から聞いたとしても相手の組の名前ぐらい出てるだろ。なんで仇名だけ覚えて、肝心肝要な組の名前を忘れてんだ。しかも正当化すんな）

思えども口には上らせず、代わりに「それでいいから教えろ」と続きを促した。文句を言いたいのは山々だが機嫌を損ねたらもつと状況把握が難しくなってしまう。

貞清の脳みそは一つの物事しか考えられないようにできている。しかも許容量が圧倒的に少ない。新たな情報が入れば古い情報はどんな重要な事柄でも次々と忘れていく。

組が立ち上がってから4年、貞清の頭の悪さはどう教育しようとも改善されない。だから深見はなんだかんだで文句を言いつつも、ここぞという時には折れる。

（バカ猿の扱いも上手くなったもんだな…）

ふと思いつき、なんだか急激に老けたような気分になって心の中でため息を吐く。

深見の考えを知ってか知らずか、貞清は素直に口を開いた。

「キョウジンだ。凶悪の凶に刃で凶刃。刀使うとかで…詰めてたヤツらはほとんどコイツに斬られたらしい」

刀とは日本刀だろうか？えらく古風な武器だ。20人も相手に立ち回れるものなのか。詰めていた連中だって抵抗しただろう。

「銃とか持ってたのか？」

深見は怪訝な顔で追及した。

「詰めてたヤツらか？」

「両方だ」

「凶刃は刀だけだ。詰めてたヤツらは持ってたし撃った。けど効かなかった」

「効かなかったってなんだ」

防弾チョッキでも着ていたのか。しかし、そこまで保守的な人物ならば近接戦闘の刀より遠距離の銃を使いそうな気がする。

明瞭にならない凶刃の人物像に頭を悩ませていたら、

「弾を斬るんだってよ」

貞清が突拍子もないことを口走った。

弾、前後の会話を考えると命のことじゃない。拳銃の弾のことだ。

それを 刀で斬った？

「寝惚けてんのか。そんな人類は現実にいねえ」

きつとゲームの知識と混同しているに違いない。どこまで世話の焼ける脳みそだ、と顔を顰めて即座に否定した深見に、貞清は口をへの字に曲げて言い募ってくる。

「寝惚けてねえよ。郷田さん…じゃねえ、4代目が言ってたんだ。

その凶刃ってヤツ、4代目と因縁があるらしくて何回か刀交えてるらしい」

「ああ？」

「なんだよ、まだ信じらんねえってのか？郷田さんも拳銃は豆鉄砲だつつつてたぞ」

「…いや、ねえよ」

否定しつつも危うく信じかけながら、深見はげんなりと両肩を落とした。たしかに郷田なら弾くらい一薙ぎで弾き返しそうだ。郷田の腕っ節は昔、鳴美から嫌というほど聞かされた。愛用の黒い青龍刀で車のドアを両断する場面もこの目で見た。聞かされていた腕っ節が本当なのだと思い知り、以来、深見の中で郷田のイメージは魔王である。

だがそんな人外レベルとどう戦えというのか。郷田と何回か刀を交えているということは凶刃も郷田並みの腕っ節を持っているということに相違ない。深見も組員もヤクザだが善良な市民だ。RPGに喩えるなら町の通行人Aだ。貞清だつてレベル10くらいだ。魔王クラスなんかと相見えたら一撃死確定だ。

こうなったら事務所を放棄して、組員総出でどこぞへと隠れた方がよいのではないか…。慰安旅行も兼ねて温泉にでも行くかと頭の中で組の財源を洗い直していたら、どこからかゴジラのテーマが流

れ出した。

「お、4代目だ」

「…なんでゴジラにしてんだ」

「イメージピタシだろ」

確かにそういうイメージではあるが、そういう問題ではない。相手は魔王だ。人員1万人規模の東郷会を束ねる4代目会長だ。深見や貞清のはるか上を行く極道界の重鎮だ。いくら昔から知っていると言っても礼儀を弁えるべきじゃないのか、というか、立場がなくても深見は郷田に恐怖を抱く。

中身ではなく腕っ節以前に外見が。ただ立っているだけでヤクザと知れる、ヤクザ以外の職業には就けそうにない風貌が恐ろしいのだ。

ドオオオンのゴゴゴゴゴ…だのという効果音を背景に背負っていそうな郷田の姿を思い出して、本能的に逃げ出したい気分陥った深見の前で、貞清がスウェットのズボンから携帯を取り出して通話を開始した。

「もしもし?…はい、ちゃんと事務所でおとなしくしてます。…や、全然、ぜんっぜん、気にしてないっす!ウチのもんだってやるときやります!…へへっ、郷田さんにそう言ってもらえるだけで十分っすよ」

身振り手振りを交え、すっかり浮かれきった様子で応対している貞清を尻目に立ち上がり、隣室へと足を向ける。

「4代目から連絡入ったぞ」

ドアを開け、待機する組員たちに告げてやると全員が全員、ほっと安堵の息を吐いた。

「あー、緊張した!これで一安心っすね!」

「マジでどうなるかと思った…」

「氣い抜けたら腹減ってきたぜ。飯買いに行かね?」

一瞬にして緩んだ、和気藹々とした雰囲気。深見は眉を顰める。
(まだ連絡入っただけだろ…なんで、てめえらはあのおっさんをそ

こまで信頼してんだ？)

組員だけではなく皆そうだ。貞清はヤクザになる以前から郷田に懐いているし、貞清の嫁で深見の前妻である沙織に至っては、郷田と顔を合わせる以前から憧れを抱いていて出会った瞬間、恋に落ちた。深見の娘を産もうとも貞清と再婚しようとも、揺るぐことなく一心に郷田を恋い慕っており、ほぼ望みがないということが判明してから諦めずに郷田の嫁の座を虎視眈々と狙い続けている。

深見の保護者役の鳴美にしてもそうだ。「ヤクザは嫌いだ」と明言していて、東郷会に所属した深見に「二度と顔を見せるな」と勘当宣言まで出したというのに、誘った郷田に対しては何一つ文句を言わなかった。それどころか、深見の知らぬところで郷田に「アキを頼む」と頭を下げたらしい。

東郷会の古参幹部だって面と向かつては郷田に食って掛からない。おそらく本心では実力を認めている。40前後の若造に出し抜かれたことが癪に障っているだけだ。あと数ヶ月もすれば自然と従うようになるだろう。郷田自身もそれがわかっていいるから今は無理に命令を出さない。

貞清とは格が違う。ただその場にいるだけで人を従える。だから魔王のイメージなのだ。おそらく郷田こそ？王様？と呼ぶにふさわしい人物。

(けど俺は…)

思い出す。夕暮れの光景。

「王様じゃないよ。…あの人は家族だから」

そう言って、ぼんやりと空を見上げていた彗の横顔。

(あれはアイツの本心だ。だから俺は)

認めない。代打ちとして組員として下に置かれていても。

郷田は彗を殺した。直接手を下していなくても、命を狙うヤクザたちに引き渡そうとしていたのだから同じことだ。

はしゃぎ出した組員たちから視線を外して煙草を啜える。半開きにした背後のドアからは浮かれた貞清の声が続いていた。

モヤモヤとした気分を抱えて、左手にぶら下げた買い物カゴに野菜を放り込んでいく。

深見は事務所から程近いスーパーに来ていた。郷田を慕う組員たちの会話を聞きたくなかったのと、安心したら腹が減ったと騒ぎ出した組員たちに飯を作ってやるためだ。

父を亡くすよりも前に母も亡くしている深見は幼い頃から台所に立ってきた。長年、やっていれば自然と上達するもので深見の料理の腕前はそこいらの主婦よりも断然上手い。

元々几帳面な性格でもあるので掃除・洗濯などもキッチリやる。むしろ片付いていないと落ち着かないし、不健康な食生活を送っている人間を見れば「ちゃんとしたものを食べさせなければ」という使命感じみた気持ち湧き立つ。

父と暮らしていた頃はこんなに世話焼きではなかったような気がする。おそらく慧と、慧が10年前に道端で拾ってきた桐生という一つ年下の青年のせいだ。

慧は飛行機事故の後遺症で内臓が弱っている。毎食後、胃痛と吐き気に苛まれるので飯を食わずに酒ばかり呑む。

保護者の郷田曰く、当初は酒の酩酊感で食後の吐き気を紛らわせるために呑んでいたらしい。しかし深見が慧と出会った時には既にただの酒好きだった。そして中学を卒業して高校に入学し、郷田が諸事情とやらで海外に旅立った後から一足飛びにアル中と化した。

スナック菓子とサプリメントの錠剤をつまみにして、自宅に限り延々と呑み続ける。学校だけはマトモに通い続けていたが掃除も洗濯もしない。

桐生は桐生で寛容すぎる人間だった。無警戒・無抵抗・無頓着で無意思。慧に拾われた理由もぶっ飛んでいた。

「弟の入院費払う為に家を売ったら住む所がなくなっただんで、公園で寝てたら荷物パクられて金ないし、腹減ったと思ってゴミ漁ってたら、この人が飯奢ってくれて「手間の掛からないペットが欲しいんだよね」って言われたんでついてきたんスけど、この家ってペット禁止なんスか？」

あっけらかんとした態度で、彗に首輪を嵌められた状態でおとなしく撫で練り回されながら言った言葉だ。

倫理観が欠落している彗と自尊心が欠落している桐生の相性は抜群で2人はとても仲がよかった。一緒にスナック菓子生活を送り、一緒にダラダラと酒に浸り、一緒に眠る。彗が毎夜ソファで酔いつぶれるので桐生の寝床は床の上である。

けれど互いに気にしない。彗はニコニコと爽やかな笑みを湛えて「ペットだから」の一言で片付けたし、桐生はキョトンとした表情で「寝たら意識ないんで」という理解不能な理論を展開した。問い詰めてみたら双方「とりあえず屋根があつて物（酒）が食えればそれでいい」という考え方だった。

極論すぎる2人の生活観に深見はキレた。ガミガミと説教を撒き散らしながら、荒れ果てた室内の掃除をして高々と積み上げられた洗濯物を洗い、きちんとした食事を用意した深見に対して2人が送ったのは賞賛と拍手だ。説教の効力はまるで発揮されず、毎日飯を作りに通うのが面倒になり、郷田が彗に残っていた住居が高層マンション50階のワンフロア丸々一室という豪勢な部屋だったので、ついには深見も同居を開始した。

見過ごせなかった。深見は彗に麻雀を打つための資金を援助してもらっていた。恩があった。だから生活の面倒くらいは見てやろうと

（そりゃ言い訳だろ）

真剣な眼差しで手にしたブロッコリーを品定めしながら、恩着せがましく目を逸らそうとしている自身を否定する。

本当は違う。当時はわからなかったが今ならわかる。

厚意で世話を焼いていたんじゃない。自分の欲求を満たす為にムリヤリ入り込んだ。

壊したかったのだ。

2人の関係が気持ち悪くて。

慧と桐生は歪だった。人間をペットとして扱うなど受け入れがたい嗜好だ。このままだと慧は桐生の人生を狂わせる。

そう思ったから引き剥がした。けれど上手くいかなかった。桐生を実家に返しても慧は桐生に依存し続けた。同じ高校に通わせて、毎日のように泊まらせて、桐生の弟たちに対しても優しく振る舞って手懷けた。

気持ち悪い。何故そこまで桐生に依存するのか。

慧は桐生のことが好きなのではないか。

深見の性癖は基本的にノーマルだ。女好きで手が早い、2股3股は当たり前といった典型的なタラシだった。

だから慧に嫌悪を抱いた。

桐生を完全に慧から引き剥がそうとした。

慧よりも上手く、桐生を甘やかして 誑かして。

桐生を落とすのは簡単だった。もとより自我の薄い人間だ。好きだと言えば断らない。嫉妬深い男を演じて慧のスキンシップを退けるよう命じれば言うとおりに動く。

慧は不満げにしていたが強く出ることはなかった。「桐生が言うなら仕方ないよね」と笑い、「桐生を幸せにしてね」と深見に言う。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

男同士で恋愛など考えたくない。深見は今までどおりに浮気を繰り返した。

だがどこからも文句は出なかった。桐生は何も言わずに従う。慧は桐生がそれでいいなら、と口を挟まない。

自分がバカになった気がした。けれど今更やめるわけにもいかな

い。彗の桐生への執着は異常だった。

「アキ、まだ桐生のことが好き？」

彗は深見が浮気する度に聞いた。

そして毎回、邪気を感じさせない笑顔で言う。

「飽きたら俺に返してね」

桐生は俺が拾ったんだから。ずっと、ずうっと、俺の物。

謡うように繰り返されるセリフは、ほとんど脅しのようなものだった。

気持ち悪い。俺はホモじゃない。けど別れられない。別れたら桐生は彗の所有物になる。

転機は桐生とつき合いだして半年が過ぎた頃。

「俺、アキさんのこと好きっすよ。…今更っすけど」

ある日、唐突に桐生が言った。

「…じゃあやるか」

その気になったのは興味本位。

必死に堪える桐生がおもしろくて、快楽に乱れる様が滑稽で、嗜虐心の赴くままに何度も無理強いをした。

だが、すぐに飽きた。やはり抱くなら女の柔肌の方がいい。貞清の女であつた沙織に手を出したのはそんな理由だった。

真相を告げられたのは6年前の2月。

「アキ、おめでとう。さおりんに子供ができたって」

何故、彗が深見と沙織の関係を知っているのか。

「認知にする？結婚にする？さおりんはどっちでもいいんだって。でも子供産んだら別れるって言ってたよ。貞清が許してくれたから自分の知らないところで何が起こっていたのか。」

「俺は結婚がいいと思うなあ。さおりんのパパって葛葉会の若頭だし。認知だと怒りそう。ちゃんとしたお付き合いの手順を踏んで、好き合って結婚したけど1年待たずに破局。離婚の原因はさおりん

の浮気。貞清とより戻してアキは捨てられちゃったっていうのが一番、事を荒立てずに済む方法。もちろん子供の親権はアキのもの。あ、そうそう、今ちようど妊娠2ヶ月なんだって。生まれるのは秋頃だね。9月かな、10月かな。賭けてみる？」

「なんで、てめえは、そんなに嬉しそうにしてんだ」

カラカラに乾いた声で深見は聞いた。

「だって、4年越しの夢がようやく叶ったんだよ？」

感情を含まない、完璧な笑みを貼り付けて彗が笑う。

首筋に冷たいものを押し当てられたようで、ぞくり、と肌が粟立った。

いや、実際に何か冷たいものが首の後ろに触れている。

「っ！？」

慌てて振り返った深見は左手に買い物カゴを、右手にブロッコリーを握り締めたまま、凍りついた。

長い髪、無精ヒゲ、銀縁の丸眼鏡に眠たげな目つき。

黒ずんだ指先を宙に浮かせて、深見の背後、今は正面に猫背で佇む中年男。

後に貞清から教えられた、この男の名前は狭山。関西で彫り師を生業にしているらしい。

5年前の。悪夢の。二度と見たくないと思っていた顔。

「なあ、そのブロッコリー譲ってくれへん？めっちゃ食ってみたいんやけど」

「…何しに出やがったああっ！！」

深見はブロッコリーで狭山の顔面に殴りかかった。

腕を曲げたままでも触れられる至近距離。だが深見のブロッコリーは空を切った。

「っ、くそ！」

まさか、この距離で避けられるとは。勢いをつけすぎてバランス

を崩した深見は前に向かって2・3歩よろけた。

体勢を立て直す間もなく狭山の胸に肩がぶつかる　と、思いきや、みぞおちに圧力が掛かった。

ぶつかる直前、するりと身をかわした狭山が深見のみぞおちに掌を押し当てたのだ。

単に身体を支えただけなのか、その気になれば一息で伸せたという意思表示なのか。眠たげな狭山の表情からは読み取れない。

「あんた、それはアカンで。食べモンは大事にせえな」

「…うるせえ」

低い声で唸り、腹に当てられた手を払いのける。狭山なんぞと同意見なのは癪に障るが食べ物は大事にしなければならない。ブロッコリーをカゴに放り込んでカゴごと床に置き、拳を握って改めて対峙した。

「ここでケンカする気なんか？」

狭山は剣呑な目つきをした深見を呆れた顔で眺めて、両手をぶらりと身体の横に下げたまま面倒そうに佇んでいる。

「場所なんざ関係ねえ。嫌なら逃げやがれ。背中に飛び蹴り食らわせてやる」

「なんでわざわざ宣言すんねん」

「正面からボコった方が気が晴れるからだ！」

叫んで、右手を振り上げた。突然、始まったケンカに横から「キヤア！」と甲高い声が上がったが、深見は気にせず狭山の顔面に拳を突き入れた。

が、またもやスルリとかわされた。諦めずに左の拳で追い縋る。しかしこれも上体の動きだけで避けられる。

苛立つ。5年前の一件だけではない。その後の苦難を思えば1・2発殴ったぐらいでは気が済まない。

（表、歩けなくなるまでボコる！）

深見は湧き立つ闘争本能に従って次々と拳を放った。

「避けんな！」

「そりゃあムリな話やで」

「じゃあ動くな！」

「言葉、変えただけやん」

「だったら死ぬ！今すぐ、ここで自殺しろ！」

「…それ、ちよつとおもろい発想やな。どうやって死んだらええねん？」

「俺に殴られろ！」

「あ、なんや、そういう意味か。すごいな、あんた」

「なにがだ！」

「同じこと言うとなのに意味わからなかった」

「褒めてねえだろ！感心してるみたく言うな！」

口論の間も狭山はまったく苦にせず、口元にうつつすらと笑みすら湛えながら深見の拳を避け続けた。

いつの間にか深見たちを取り囲むようにギャラリーが集まっているが、誰一人として巻き込まれることなく、野菜の並べられた棚も一切乱されていない。

狭山が上手く避けているからだ。深見の身体を中心に、クルクルと円を描くようにステップを踏んでいる。

（コイツ…案外つええ…！）

当たるところか掠る気配すらない。狭山は深見の拳が届くか否かという寸前まで待つてから最小限の動きで回避している。いつだってカウンターを食らわせられる…それなのに反撃してこない理由は何故か。

（嘗めてんのか！）

思った瞬間、カッと頭に血が上った。

「っざけやがって！」

拳を繰り出す。横にかわされる。下段と上段に2発。軽く後ろに下がって避けられる。

「当たらんなあ…飽きてこおへん？」

「飽きたってんなら、止まり…やがれ！」

続けざまに3発。その後、頭を狙って回し蹴りを放った。空手4段の前妻・沙織から体得した本格的なハイキックだ。

狭山は不意を突かれたような表情で床に屈んだ。頭上を通過した深見の右足が空中に残っていた長い髪を払ってパサリ、と音を立てる。

（勝った）

深見は片方の口角だけを引き上げて鼻を鳴らした。しゃがみこんでしまえばもう身軽には動けない。脳天に踵を落としてやろうと床に下ろした足を再び振り上げる。

ガツ、と鈍い音がして 直後に聞こえた低い笑い声に深見は身体を強張らせた。

「つくく、なんや…楽しいな」

狭山は頭の上で腕を交差させて深見の足を受け止めていた。言葉どおり、口元には笑みがある。今までもニヤニヤと得体の知れない笑みを浮かべていたがソレとは種類が違う。

「今日は朝から調子ええねん。中途半端に止められて鬱憤も堪つとる。そやからちゃんと、マトモに相手したるわ」

眠たげな目がずっと細まる。うつすらと開いた唇の間からチロリと舌が覗く。身体中にねっとり絡みつくような視線。薄暗い路地裏の生ゴミ、そこから零れた腐水のような。

虎の尾を踏んだ、とでもいうべきか。刺青を彫っている時も、身体を交えている最中でさえも感じ取れなかった存在感が一気に強まった。

「ほな、遊ばか」

深見の足を払いのけてユラリと立ち上がる。得体の知れない、話の通じそうにない獣じみた気配にぞわりと悪寒が広がる。だが恐怖ではない。恐怖もあるかもしれないが、それ以上に強い感情が深見の心を占拠している。何故この男の存在感が希薄だったのか、その理由がわかったからだ。

おそらく狭山は今になってようやく

深見という人間に興味を

持った。

「っ、いらねえ!!」

吐き気をもよおすほどの怒りが身を包んだ。当然である。人の身体に一生消えない刺青とトラウマを植え付けておいて今の今まで無関心、町の通行人A扱いだ。

「てめえがそういう態度取るってんなら俺もガン無視だ!二度と現れんな!」

ズビシ、と指を突きつけてから背を向けた。床に置いた買ひ物力ゴを拾い上げて、事の成り行きを見守っていた野次馬に鋭い眼光を飛ばす。

「見世物じゃねえ!さっさと散れ!!」

怒鳴れば蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。きつと通報もされないだろう。このスーパーは事務所から近い。組員たちと共に訪れることも多いので、深見がヤクザであることは知れ渡っている。

閑散とした野菜売り場に深見と狭山だけが取り残された。

深見は既に事を治めたつもりで目当ての野菜へと意識を移していた。余計な手間を食った、ヘタに暴れて余計に腹が減った、左手の腕時計を見れば時刻は1時を回っている。事務所を出たのは12時半頃だったので、かなりの間ブロッコリーを眺めて物思いに耽っていたのだろう。

狭山の目についたのはきつとそのせいだ。深見のことを覚えていたのではなく、長々とブロッコリーを眺めているヤクザが気になって、よく見れば見覚えがあったから近寄ってきた。

（くそ、やつぱ元凶はスーだ。死んでまで世話焼かせんな。いい加減におとなしくしとけ）

心の中で悪態を吐き、にんじん、玉ねぎ、じゃがいもをカゴに入れて肉売り場に向かう。

遠巻きに深見の様子を観察してヒソヒソと陰口を叩いている主婦の団がうつとおしい。だが善悪でいえば間違はなく自分が悪だ。

このスーパーは私生活においても利用している。一応謝っておく

か、と女向けのタラシ笑顔を作り、ペコリと小さく会釈をした途端、
「気持ちわるっ」

背後から関西弁が聞こえてきた。

「…なんでついてきてんだ」

振り返った深見の顔が一瞬にしてヤクザに舞い戻った。

何故だか狭山がいる。両手をカーキ色のモッズコートに突っ込んで姿勢悪く立っている。

「最初に言ったやん。ブロッコリーが気になってん」

「他にもいっぱいあんだろ」

「他のは気にしてへんかったやん」

狭山はフラリと深見の傍に寄ってきた。先ほどまで殴り合っていた　　というか、一方的に殴り掛かられていたというのに随分と無防備な振る舞いだ。

「なんや、めっちゃ真剣な顔で見つめとったからブロッコリーとは思われへんモンでもくつついとるんかて…」

「考え事してただけだ。ブロッコリーに異変はねえ」

手を伸ばしてくる狭山から力ゴを遠ざけて、深見は洪面を浮かべた。

何故、平日の真昼間からこんな浮浪者じみた中年男とブロッコリーについて語り合わねばならないのか。ヤクザという職を抜きにしても社会に適合できていないような気がして、今頃幼稚園でお遊戯に勤しんでいるであろう娘に対して申し訳ない気持ちになってくる。
(ちゃんと仕事しねえと…)

半年前、5歳になったばかりの娘の笑顔を思い出して気を引き締めた。紅貞組は現在、危機に瀕している。連絡が来たからといって本家からの支援を受けられると決まったわけじゃない。いつ関西の凶刃とやらが殴り込んでくるかもわからない　　と、考えてふと気がついた。

狭山は関西で活動している彫り師だ。凶刃の噂やなんちゃら組の内情を知っているのではないだろうか？

正面に立つ狭山の様子を観察する。狭山は未だにブロッコリーへの興味が薄れないのか、買い物カゴの中をじっと見下ろしている。

「…てめえ、このブロッコリー食いたいか？」

「調理方法によるわ」

「ホワイトシチューだ」

「作る人誰なん？」

「俺だ」

「ほな食いたい」

「…俺だぞ」

「あんた、料理上手いんとちゃうの？」

一見ヤクザにしか見えない深見の容貌のどこをどう見れば料理が上手いように見えるのか。不思議に思ったが、そもそも狭山の存在自体が不可思議だ。

深見は気にせず「まあな」と肯定した。料理の腕には自信があるし、上手いと言っておいた方がこれから持ちかける取引に有利に働く。

取引と言っても簡単な話だ。飯と引き換えに狭山から情報を聞き出そう、情報を聞き出した後に油断していれば、1・2発、いや3発、展開によって気が晴れるまで存分に殴ってやろうという魂胆である。

「ウチに飯食いに来ねえか？」

「…どういう風の吹き回しやねん？」

あまりに唐突な深見の誘いに対して、さすがに警戒心を抱いたらしい。狭山は怪訝な面持ちを向けてきた。

だが、このくらいの反応は予想していた。深見は陳列棚に並べられた鶏肉を吟味しながら、

「もちろんタダじゃねえ。関西のヤクザ者で知りてえヤツがいる。

凶刃って知ってるか？」

と、素直に問い掛けた。

「ああ、なんや。そういうことか。ほな行くわ」

狭山は拍子抜けするほど、あっさりと頷いた。なにか裏があるのではないかと勘繰ってみたが、買い物中の狭山の行動は単純にシチュ―を楽しみにしているとしか思えなかった。

フラフラと落ち着きなく深見の周りを行き来して、少し高価なルーと安価なルーで迷う深見に「ご馳走になるんやし」とレジでの会計全負担を約束し、それならば日用品も買い込んでおこうと、あからさまにトイレトパーパーやら洗濯用洗剤やらをカゴに突っ込み始めた深見を気にすることもなく、ニマニマと妖しげな笑みを浮かべている。

「よし、終わりだ。帰るぞ」

2つに増やしたカゴを両手に持ち、狭山にも1つ持たせてレジに並んだ。ざっと見ても1万は超えるだろう。だが狭山の懐は微塵も痛まないうに違いない。

5年前、狭山が深見を買った値段は1千万だ。現金一括払いで深見を捕らえていたヤクザたちに一つの文句も言わせなかったらしい。この男のどこにそんな財力があるのか。相当、腕のいい彫り師らしいが深見にはまったく理解できない。己の背中に刻まれた刺青を見てもイマイチ迫力がないのだ。1千万をポンと出せるほど稼いでいるようには思えない技量である。

（つか、まず見た目が富豪に見えねえ）

深見の狭山に対する第一印象は浮浪者、マジマジと眺めたところで引きこもりニートだ。5年の歳月が流れた現在もまったく変わらぬ風貌で、だからこそ深見は狭山の顔を見た瞬間にすぐさま本人とわかってブチ切れた。

ヒゲを剃って髪を切って眼鏡をコンタクト、せめてもうちょっとマシな形のフレームに変えれば、少しは見える顔になるだろうに……

と横目に観察していたら、

「手料理とかめっちゃ久しぶりやわ。しかも洋食やる。和食は食わせてもろたけど洋食は専門外やったからなあ……」

昔、つき合っていた人間のことも思い出しているのか、狭山はしみじみとした口調で言った。

レジの台の上にカゴを置いて、ふと思い立った疑問を口にする。

「自炊しねえのか？」

「料理のできる男は稀やからモテ要素になっとんねんで」

妙に説得力のある言い分だ。ホモのくせに、と考えて背筋が寒くなった。そういえばこの男は真性のホモだったと今更ながらに実感したのだ。

嫌悪が顔に出ていたのか、狭山はムツとした表情で「勘違いしなや」と否定してきた。

だが続いた言葉は「てめえこそ勘違いだ」とツツコミなくなるようなセリフだった。

「料理できる男やったら誰でもええっちゅうワケちゃうで。俺にも拒否権はあんねん」

「女だったらの間違いだろ！」

間髪入れずに訂正した。さらっと自分の性癖を暴露した狭山の発言にレジのおばちゃんが目を見張ったからだ。

しかし狭山に空気を読む機能は備わっていないらしい。

「なんでやねん。俺は真性やて言うたやる。そやからあんまし好みやないあんだでもヤれて……」

「黙れ！黙って金だけ払え！！」

何故こんなに堂々と自分がホモだと公言できるのか。間違いなく勘違いしたであろう、おばちゃんの生温い視線を感じながら深見は急いでスーパーを後にした。

組には電話で「急用ができた」と報告した。貞清は未だに誰かと

電話中らしい。繋がらなかったたので坂本に「何かあれば留守電に入れる」と伝言を頼んでおいた。

その後、両手に大荷物を引っさげて帰路についた。

商店街のアーケードを抜けてすぐの、立地条件バッチリな自宅マンションの出入り口でオートロックの鍵を開ける。

管理人の在駐しているロビーを抜けてエレベーターに乗り込み、部屋のある5階のボタンを押したところで狭山がマジマジと自分を眺めていることに気がついた。

「なんだよ？」

「キレイな家に住んどるなあ、て。家賃、高いんちゃうの？」

「20万」

昇っていくエレベーターの表示を眺めながら仏頂面で答えた。高いても安いとも言わずに金額だけ告げたのは、自尊心が許さなかったからだ。

20万の家賃。狭山からすれば大した額ではないだろう。会計の際に覗き見た狭山の財布の中には一万円札が3束、10枚一纏めのズクになって入っていた。

案の定、狭山は体を揺すって居心地悪そうに身じろぎした。

「…そりゃあ、結構な額やな」

いかにも話を合わせただけのような口調だ。絶対に安いと思っている。深見は一般常識を教えるべく、郊外の平均的な家賃を告げてやった。

「ソレは人が住める場所なんか？」

「…てめえの価値観はよくわかった。30年ローン組んでるサラリーマンの前で同じ事言って集団でボコられてこい」

腹が立つ。奇しくも替と同じ反応である。富豪というのは皆、金銭感覚が狂っているのかもしれない。

一気に機嫌を急降下させた深見の隣で、狭山が両手にぶら下げたスーパ―の袋を揺らして首を傾げる。

「うーん、ほな、なんであんたはそないに高いトコに住んどんねん

？」

「好き好んで高いトコに住んでねえ。管理人在駐しててオートロツクで昼夜問わずに人が多いトコって探してたら、ココが一番安かっただけだ」

「えらい嚴重警戒やな」

「やってる仕事の仕事だからな。娘に手出ししにくいように最低限の自己防衛だ」

麻雀の代打ち、という仕事はいくら組がバツクに控えていても逆恨みの危険を伴うものだ。深見は身をもって体験している。また娘に手を出す馬鹿がいけないとも限らない。

そう考えて深見は東郷会に所属すると同時に、娘共々このマンシヨンに越してきた。

「どつかの水モが馬鹿げた忠告してくれたおかげで、こんくらいの頭は回るようになった」

チン、と音を立てて扉の開いたエレベーターから降りて、先に廊下を進みながら嫌味を言つてやる。

「そりゃあ結構なこっちゃ」

反省の見えない声音に地上へ突き落としてやろうか、と腕を伸ばしかけたが、すんでのところで思い留まった。こんな男のために殺人犯になるなど、それこそ馬鹿げている。

灰色の塗装が施された廊下を少し歩いて、自宅のドアの前に立ちポケットを漁り、カードキーを取り出してリーダーに通す。その後、普通の鍵を鍵穴に差し込んで回したらガチャリ、と重い音が鳴つてロックが外れた。

鈍い金色の取っ手を引いて部屋の中に入る。

深見の一連の行動を興味深げに眺めていた狭山も「お邪魔します」と一声発しながら後に続いた。

「なんや、生活感に溢れとるな」

外観と値段の割にはそんなに広くもない、１LDKの部屋の中を

眺めた狭山の一言目はそれだった。

たしかに自分でも思う。廊下から入ってすぐの台所は今朝、家を出たままの状態で少々散らかっているし、リビングの隅には部屋干しの洗濯物がぶら下がっている。

「客なんざ来ると思ってたかったからな」

ただ事実を言っているだけなのに、言い訳のように聞こえるのは自分の心に疚しい部分があるからなのだろう。

深見は慧が死ぬまで娘の名前すら知らなかった。

4年の歳月を掛けて為された慧の企みは、深見という便利な家政夫を一生手元に置いておくため。

そのために桐生を拾い、わざと狂気じみた振る舞いを見せて深見が慧の家に転がり込むように仕向けた。

そして深見を縛り付けておくために桐生が使えなくなったと知るや否や、沙織が深見に気を持つよう吹き込んだ。

子供さえ手に入れば、深見は慧から離れない。

血の繋がった家族だから。

そんな理由で人の心を弄んだ外道。

許せなかった。好きにしろと言ってフラフラと遊び回った。

生まれた娘のことなど、どうでもよかった。

5年前、深見の身柄を買い取り、娘を人質に取ったという狭山にも同じ事を言った。

「最低やな」

狭山は冷ややかに断じた。

「責任擦りつけとるようにしか聞こえんわ。スウくんが裏で何仕組んでようと、ガキ出来たんはあんたと嫁さんがゴムつけずにやった結果やろ」

文句のつけようがない生々しい正論だった。

解放された深見は娘と共に暮らし始めた。

父子家庭で父親はヤクザという一般家庭よりも圧倒的に劣っている家庭環境ではあるが、娘が幸せに暮らせるように精一杯の努力をしているつもりだ。

だが、どれだけキッチリ家事をこなそうとも、娘をどうでもいいと思っていた過去は消せない。

無責任なお前なんかには子供が育てられるものか、と常に誰かから責められている気がする。

「散らかつるとは言うくらんで。女の手え入つとるみたいに片付いとる。けど住んどる雰囲気はないな。通わせとるんか？」

世辞か厭味かと思つたが、コルクボードに貼られた娘の写真を眺めている狭山は単純に聞いてみただけのようだった。

「住んでねえし通わせてもいいねえ。上着よこせ」

深見は自分のコートをハンガーに掛けて、部屋のあちらこちらをうろついている狭山に手を差し出した。

狭山は首を傾げながら、言われたとおりに上着を脱いで深見へと差し出した。受け取った深見は見た目よりも重さのあるモッズコートを自分のと同じようにハンガーに掛ける。

一連の動作を見た狭山の表情は驚きと疑惑、どちらつかずな表情を浮かべている。どちらの感情が強いのか、割合を判定する前に今度は思案へと変わった。すぐに口を開いて疑問をぶつけてくる。

「…アンタ、A型やろ」

疑問ではなく断定だった。しかも間違っている。

「よく言われるけどな。こう見えてO型だ」

几帳面さは母親の教育の賜物だ。血液型で性格が決められるならば、もつと楽に生きることができるだろう。仕事でも日常でも、深見は適当・大雑把という言葉とは程遠い性格をしている。

深見が部屋の中を片付けて、買ってきた荷物を仕分けしている間、狭山はおとなしく台所のダイニングテーブルのイスに座っていた。

だが、おとなしくしているのは身体だけで、首から上は忙しくキョロキョロと辺りを見回している。

突然人の家に連れてこられて落ち着かないのか、それとも人の家だからこそ興味があるのか。まるで借りてきた猫のようだと思いいながら手を洗い、コーヒーを煎れるために湯を沸かす。流しに置きっ放しだったドリッパーを洗って豆を冷蔵庫から取り出し、朝と同じ手順で準備を整えていたら、

「なあ、煙草吸っていい？あと俺もコーヒー飲みたい」

「……………人に物を強請る時の態度じゃねえ。出直せ」

深見は顔も身体も声もヒクヒクと強張らせながら言った。

いつの間に立ち上がったのか、いつの間に近寄ってきたのか、背中に狭山が張り付いている。腰に腕が回されて肩に顎が乗せられて、考えたくない、考えたくないが、まるで初めて彼氏の家に遊びに来た女が甘えているような

「なんや、足らんのか。意外と甘えたやな、アキさん」

「っ、何してんだ、死なすぞ！！」

首筋に這った生温かい感触に全身の毛が逆立った。

「離せ、近寄んな、帰れ！」

首に埋められた頭を押しのけ、腹に回された腕を引き剥がして目の前にあったフライパンを手に振り返る。

あっさりと離れた狭山は不満げな表情というよりも怪訝な表情、むしろお気に入りのおもちやを取り上げられて不貞腐れた子供のような顔で唇を尖らせていた。

「なんやねん。あんたが飯食わせたるて連れてきたんやろ」

「食わせるのは飯だけだ！」

「ナンパの常套手段やん。辞書に載せてもええレベルやで」

「その前の状況を思い出せ！ナンパしようとしてるヤツに殴りかかる人間がどこにいる！？」

「ここにおると思ってん」

「勘違いだ！人を指で指すな！やろうつてんなら容赦しねえ、ボコ

つてムリヤリ情報聞き出す!!」

流しを背に、両手でフライパンを構えて眼光を飛ばした。

一般人が浴びれば、たちどころに目を逸らす凶悪な眼光だが狭山にはまったく通じないらしい。

「なんでそないに俺から聞きたいねん？貞清から聞いたらええやん。ちっちゃい頃、よういじめられて泣かされとつた」

狭山はのほほんとした緊張感の欠片もない態度で何かよくわからないことを口走った。

「ちっちゃい頃ってなんだ？」

「ガキン頃やろ」

「言葉の意味を聞いたんじゃねえ。てめえが貞清のガキの頃を知ってる理由を聞いてんだ」

「なんや、貞清から聞いてへんのか」

狭山は少し逡巡した後、眼鏡を外してテーブルの上に置き、掌で前髪を持ち上げつつ深見に顔を近づけてきた。

「似てると思わん？」

「何がだ」

深見は身を反らして顔から顔を遠ざけた。フライパンを持つ手に力を込めて殴りつけたい衝動を堪える。

「9割くらい同じ血流れとるんやけど」

「誰とだ！」

ぐつと顔を近づけてくる狭山の額を押さえて深見は叫んだ。

近い。殴りたい。しかし狭山は無防備だ。無抵抗だ。深見に何かを知らせようと真面目な顔で迫っている。

「よう見てみい。覚えのある顔やろ」

冷たい手がフライパンを握る深見の手に重なる。堪えがたい寒気が這い上がってくる。気持ち悪い、触るなと振り払いたい、けれど金縛りにあつたかのように動けない。

眠たげな両眼が間近にある。生温かい息が唇に掛かる。外からは変わらず雨の音が聞こえてくる。

5年前の記憶が。

歪められた悪夢が。

現実と混ざる。闇に融ける。

コレは、今、目の前にいる男は 誰なのか。

雨が降ると夢を見る。

悪夢の進化版だ。深見は男を抱いている。

最初の相手は桐生。

愛情など欠片もない、酷く暴力的な感情で虐げる。

アキさん、やめて、まって、いたい、たすけて。

必死に縋る手を布団に押し付けて一方的に貫く。

しばらくすると我に返って愕然とする。

桐生の身体は冷たくなって動かない。

目を閉じて、目を開けて。

見下ろせば組み敷いた相手が彗に変わっている。

彗は笑みを湛えて深見を詰る。

どうして置いていったの？ どうして一緒にいてくれなかったの？

どうして俺を抱くの？俺はもう死んでるのに。

謡うように言い、軽やかな笑い声を立てて、傷だらけの瘦躯で縋りつく。

見たくない、聞きたくないと目を閉じ、耳を塞げば。

冷たい手が身体中を這い回る。

「アキさん、アキさん。ちゃんと見いな」

間延びした声が名前を呼ぶ。

驚愕に目を見開いた先にあるのは

見慣れた半眼。重ねられた唇。

元々一部だったかのようにするりと舌を差し込まれる。首の後ろ

を掴む指は冷たいのに狭山の舌は熱い。

夢じゃないからか、と思った瞬間、現実に戻された。

「ったあ！」

悲鳴を上げて狭山が仰け反る。深見が思いきり、髪を引っ張ったからだ。

「なにすんねん！」

「コツチのセリフだ！！」

流された。なんでだかわからないが流された。

とんだ失態だ。自己嫌悪に陥った深見の手の中からずりりと髪を引き抜いて、狭山が不可解なことを言い出した。

「なんや、誘ってんのとちゃうんか」

冗談じゃない。深見は基本的に女一筋だ。例外である桐生とて女が男かわかりづらい中性的な顔立ちだった。彗が夢に出るのは娘を押しつけたという罪悪感からだろう。

「誰が誘うか！てめえみたいなおっさん、ヤンのもやられんのも二度とゴメンだ！！」

無精髭ぼうぼうの中年は断固拒否する、と口元を拭う。

狭山はそんな深見を呆れた顔で指差した。

「その割にはムスコさん、ビンビンやけど」

何を言われているのか理解できなかった。怪訝な顔で示された指先を辿り、見下ろして我が目を疑った。

ガチガチにいきり立った股間がテントを張っている。

「……………つあああああつ！？」

雄叫びを上げて座り込み、フライパンを床に置いて両手で前を隠した。

（なんでだ、なんでこんな中年相手に元気になつてんだ！！）

ダメージがでかい。泣きそうなくらいに甚大だ。

何故なら深見はここ数年、勃起障害に悩まされている。女相手に勃たないのだ。やる気はあるのに、いざ事に及ぼうとすると例の悪夢が過ぎって途端に萎える。

入れるのがダメならと性感マツサージやらヘルスやらにも足を運んでみた。もう形振り構っていられないと精力増強剤なんかも飲んでみた。けれど今度はどれだけ頑張ろうとも果てない。どうしたって女を相手にできない。AVすらも無理だ。性欲を煽るだけで射精には至らない。

よって、どうしているかという例の悪夢をオカズにして抜いている。

死にたくなるほど不本意だが背に腹は変えられない。どの道、溜まるとあの夢を見るのだ。26にもなつて男相手に抱いたり抱かれたりするような夢で夢精なんぞしようものなら、目覚めて着替えて即座にベランダから飛び降り自殺をする。

「ベロチューだけでそんだけギンギンなるて…アンタ、相当溜まつてんねんなあ…」

他人事のような声音に青筋が浮かんだ。哀れむような顔で目の前にしゃがんだ狭山に向けて怒声を撒き散らす。

「うるせえ！誰のせいだと思つてんだ！」

「誰のせえやねん？」

「てめえのせいだろうが！」

「なんでやねん」

「てめえにケツ掘られてから、誰ともやれねえんだよ！」

怒りのままに口にして、はっと気づいた。

（何言つた？ヤバイことを口走つた。ごまかす方法はねえのか？だつて墓穴掘つただろ）

思つた時にはもう遅かつた。

必死に頭を働かせて、ごまかす方法を模索していた深見の肩にポンと掌が置かれた。

「それはたしかに俺のせいやなあ…責任とつたるわ」

体重を掛けられて体が強張る。狭山は「ういしょ」とわざとらしい掛け声を出しながら立ち上がり、あっけなく深見の肩から手を離れた。

より陰湿さが増した狭山の笑みに、もう一つ墓穴を掘ったのだと知らされる。

「何を勘違いしとるん？ここでやったら風邪引いてまうで。あーでもそうやんな。あんた一応ノンケやったもんな。そりゃあ抵抗感あるわ。素直になられへん。そやから先に寢室行っとくわ。あのドアやんな？ほなな」

反論する間もない。二の句を探して口をパクパクと動かす深見を置いて、狭山は寢室へと姿を消した。

どうするべきか。放置だ。

深見は一秒も悩まずに答えを出した。

狭山は深見を強姦した人間だ。しかも背中にムリヤリ刺青を入れて二度とマトモな職に就けないようにした。誰かに頼まれたと言っていたが到底、真実だとは思えない。わざわざ1千万も払って依頼をこなす意味がない。依頼主がそれ以上の金を出したというのなら話は別だが、単なる嫌がらせにそこまでの金を払う馬鹿がいるだろうか？ いや、いない。

だから狭山は敵だ。人生を狂わせた変態だ。何故家に上げてしまったのか、貞清のミジンコ並みの記憶力を呪いたい。顔を見たことのない凶刃とやらも恨みたい。

深見は毒薬を作っていそうな凶悪人相で寸胴の中にシチューのルーを溶かし込んだ。家庭用にしては大きい寸胴でシチューの量も軽く20人前はある。

組に電話を入れた時、坂本を始めとした組員たちはかなりしょぼくれていた。シチューを楽しみにしていたらしい。だから今日明日にでも振舞ってやろうという腹積もりだ。当然、狭山の分は用意していない。

ルーを溶かし込むのに使っていたお玉と菜箸で軽く味見をして、洗い物をしてから煙草を啜えた。

ダイニングテーブルのイスを引いて一服点ける。一仕事終えた後の煙草は美味い。シチューの下ごしらえはこれで完了した。あとはジックリコトコト煮込むだけだ。

音沙汰のない寝室のドアとテーブルの上に置きっぱなしの丸眼鏡を交互に見比べて、眼鏡の隣に置いていた音沙汰のない携帯を手に取り。現在の時刻は午後3時。そろそろ貞清から連絡が入ってもよ

さそうなものなのだが…と、考えていたらちょうど携帯が鳴り始めた。だが世にも奇妙な物語のテーマじゃない。ゴッドファーザーのテーマだ。

「…出たくねえ…」

深見は今朝と同じく携帯を睨みつけた。今日は本当に、一年に一度あるかどうかの厄日だ。

ゴッドファーザーのテーマはゴッドファーザーからの着信である。すなわち東郷会4代目、郷田からの着信だ。

何故、貞清経由ではなく直接電話が掛かってきたのか。何か厄介事が起きたのか。嫌な予感がフツフツと湧いている。

だから出たくない。しかし魔王に歯向かう勇氣はない。

「もしもし。お疲れさまです」

深見は洪々電話に出た。基本、どんな年配にもタメ口を利く深見だが郷田に対しては昔から敬語である。

受話器から重々しい声音が聞こえてくる。

『おう。待たせて悪いな。さっそくだが本題だ。手打ちの算段がついた。これで紅貞組が襲われることはねえ』

前置きのほとんどない簡潔な物言いに眉根が寄る。

郷田と長々話したい訳ではない。時々掛かってくる電話もこんなものだ。しかし現在、深見は狭山という厄介事を抱えている真っ最中である。

もっと早くに連絡をくれていれば、こんなことにはならなかった。完全な八つ当たりだが文句の一つも言いたい。しかし魔王に八つ当たりするのは恐ろしい。

恐怖と怒りの葛藤で黙り込んだ深見に、郷田が様子を伺うような声を掛けてくる。

『なんだ？何かあったのか？』

「あ…いや、なんでもないっす」

結局、恐怖が競り勝った。だが怒りも当然、身の内にある。

「本題どうぞ」

深見はガジガジと煙草のフィルターを噛みながら不機嫌な声で促した。郷田は渦中に置かれた東郷4代目だ。わざわざ身の安全を知らせてやるために直接、電話を掛けてくるほど暇な立場ではないだろう。他にも用件があるはずだ。

「…おう。盆採決が決まった。明日の夜だ」

「そうすか。で、相手は？」

深見はつつけんどんに話を進めた。盆採決ということは仕事の依頼　麻雀の代打ち業である。

盆採決は賭け事の勝敗で物事の成否を決めるというヤクザ業界の慣わしだ。双方の組の幹部と立会人の下、不正が為されないよう監視された状態で行われる。今回の騒動の発端を考えると納得のいく解決方法と言えるだろう。

少しの間を置いて郷田が質問に答える。

『立浪と葛葉：資金援助で中国マフィアも噛んでる』

「立浪つてのは関西の、凶刃とかいうヤツの組すか？」

「…おう」

「つてことは昨日のザコが出てくるんすよね」

「…まあな」

「ザコと誰すか？2対2で当然4麻だと思っんすけど。ウチからは誰出すんすか」

『ウチからはチヨとおめえを出す。相手はザコの若頭と……中国マフィアだ』

「その中国マフィアつてのは5年前のとは違っんすか」

『…当人はおんなじだっつつてるけどな…』

妙な具合だ。げっそりとやつれた口調で言い、疲れきった重々しいため息が続く。それに先ほどから返事の前に、口籠もっているような一呼吸の間が空いている。

郷田は普段、歯切れの悪い物言いをしない男だ。乾竹を割ったような性格で、だからこそ貞清たちに慕われている。

「申し訳ないんすけど、事情を説明してもらえないすかね？」

深見は流しの水道で煙草を消してから改めて聞いた。探りを入れるためだ。郷田は何かを隠している。

雀士を職にしている深見の洞察力は高い。麻雀という賭け事は相手の手の内の読み合いだ。隠し事をされれば電話の声だけでも鼻につく。だから深見の仇名は？狂犬？なのだ。

『貞清から聞いてねえのか？』

少しばかり呆れたような問いかけに、すぐさま答えを返す。

「ただでさえバカな上に身内襲われて覚えてるはずねえっすよ。俺らは4代目ほど荒事慣れしてねえもんで」

『…悪かった』

連絡を怠ったことに対する厭味に郷田は渋々といった様子で謝った。これも妙な対応だ。

会話の最初に謝った時にはあっさり謝った。今も同じ用件で厭味を言われているのだから軽く謝ればいい。

酷く鼻につく。深見はイスに再び腰掛けて、台所の蛍光灯を厳しい目で睨みつけた。

「何が起こってるんすかね」

『朝方、3代目が襲われた。これは知ってるな？』

「葛葉の坊主と立浪の凶刃が20人惨殺したらしいっすね。銃が利かねえとか…凶刃つてのは何者なんすか？」

またもや一瞬、言葉が途切れた。

『…矢車の若頭やってたヤツだ。鬼仏の叔父貴が死んで別のヤツが跡目になったから古巣に帰った』

当然のように出た聞き覚えのない名前に首を捻る。

矢車とは組の名前だろう。だが鬼仏は総和会の前代表ではなかったのか。兼任できるものなのか。ならば東郷3代目も兼任にできたのではないだろうか？

ヤクザというのは皆、欲が強い。得られる権力は全て手中にしておきたいはずだ。自ら進んで手放すとは思えない。しかも古参を差し置いての異例の人事。

郷田に対する疑念が膨らむ。深見はひとまず矢車について聞いてみることにした。

「矢車ってのはどこの組すか？」

「おめえ、それくらい……あー……いや、そうか。知らねえのも無理はねえな」

郷田は呆れたように言いかけて、独りでに納得した。

『六本木の組だ。シマはちっせえが……なんつか、まあ、組員のツテがえげつなくてな。横浜の在日米軍から世界中に武器を横流してる』

「……………ああ？」

思わず目上への対応が失せた。在日米軍と共同経営、どんなツテがあれば可能になるのか推測すら及ばない。本当に日本のヤクザの話をしているのだろうか？

『信じらんねえとは思うが……まあ、アレだ。鬼仏の叔父貴が凄かったと思つとけ。そういうツテがあるから矢車は金持ちだ。総和会での発言力もでかい』

郷田はあからさまに茶を濁した。無理に聞いても答ええないだろう。「はあ」と相槌を打って聞き役に回ることにする。

『凶刃の目論見は自分が矢車の跡目継いで、古巣・立浪と盃交わすことだった。立浪は元々、関西の2大看板だったんだが……昔、関東勢に手酷くやられてな』

苦々しい声音に貞清から聞いた話が頭に浮かんた。郷田と凶刃は何度か刃を交えたことがある。手酷くやった関東勢に郷田も加わっていたのではないか？だからこそ凶刃は東郷会を標的にしたのではないだろうか。

深まつていく疑念をよそに郷田は深いため息を吐いた。

『自暴自棄っつーんだか、猪突猛進っつーんだか……あいつあ基本的な後先考えねえからなあ……』

「仲良さそうっすね、4代目。凶刃は美形っすか」

長年の友人に向けたような口ぶりについ口が滑った。発された声

音は無意識の内に刺々しく嫌悪に満ちている。

だが仕方ないと思う。条件反射のようなものだ。正常な性癖を持つ成人男性なら誰もが抱く嫌悪感。

郷田は狭山と同種　真性のホモなのだ。

『顔はいいが相手にしたかねえな。あいつもあいつで願い下げだろ。うよ。なんつっても親の代から殺し合ってる仲だ』

郷田は平然とした口調で切り返してきた。狭山ほど開けっぴろげに触れ回っているわけではないが、郷田も自分の性癖に負い目を持つていない。

「親の代？」

『おう。俺の親父はあいつの親父を殺したし、俺の親父はあいつに殺されてる。おれあ立浪組をめちゃくちゃにしたが、昔、俺が世話になってた組織はあいつに潰された』

恨むのも恨まれるのも仕方ないと思わせる壮絶な因縁だ。

だが郷田にとっては既に過去の出来事なのだろう。険悪な様子も見せずにあっさりと暴露して話を続けた。

『まあ、とにかくそういうゴタゴタがあつてな。自分の力じゃどうにも埒の明かねえ立浪は、声掛けてきた中国マフィアの仲介で葛葉と盃を交わしたつてわけだ』

「葛葉がヤクザに戻るんすか」

実態はともかく葛葉会はあくまで宗教団体だ。組として代紋を掲げなければ盃を交わすことは不可能だろう。

鋭く指摘したら、電話口の向こうからクツクツと喉を鳴らす低い音が聞こえてきた。

『おめえは案外しつかりしてるな。そのとおりだ。葛葉は本日付で暴力団に返り咲いた。しかもサツの指定なしだ』

「どうすりゃそうなる!？」

放り投げるような郷田の言葉に深見は目を剥いた。

指定とは指定暴力団　ヤクザにとって目下最大の締めつけとなっている暴力団対策法がその組織に適用されるかどうかという判定

である。5年前、解散するまでの葛葉会は指定を受けていた。紅貞組も当然指定されている。親である東郷会が広域指定を受けているからだ。

だから、もしも郷田が言っていることが本当であれば相当面倒なことになる。指定を受けていない暴力団に暴対法は適用されないのだ。葛葉と常日頃から争っている紅貞組は今までも更に後手に回ることになる。

「…本気で言ってるのか？」

もはや敬語を使えるだけの心のゆとりもない。深見は否定の言葉を願いながら唸り声で問い掛けた。

『本気だ。カビ頭がトップに立った。さしずめフロント暴力団ってとこだな。舎弟も総入れ替えて新しい幹部の経歴はほとんどがシロだ。暴対法指定は前科持ちの人数とサツのさじ加減一つで決まるからな…チーマー上がり of 八タチそこそこのガキが起こした組なんぞ、お役所仕事であつさり素通りだ』

無情に告げられた得心のいく説明に、深見はイスの上に両足を乗せて携帯を耳に押し当てたまま項垂れた。

やはり面倒なことになっている。カビ頭とは葛葉の破戒僧の息子・ハンのことだ。貞清と同レベルの頭の足りなさだが貞清よりも獣に近く、それゆえに直感力に優れている。

すなわちどういうことか。簡単に言うと無法者。日本の法律どころか、ヤクザ業界のしきたりにさえ従わない。紅貞組のシマで大麻を売り捌き、深見たちに見咎められた後も「シマ？なにそれ食えんの？美味しいの？」と素で聞いてきたアホの極みだ。きっと見た目だけじゃなく脳みそにもカビが生えているに違いない。

そんなハンがトップに立った指定暴力団じゃない葛葉会。しかも父親の破戒僧はヤクザとすら認定されていない。どれだけ人の店で暴れようとも一般人、どれだけ人のシマで闇金を営もうとも指定外。広域指定暴力団傘下である紅貞組の面々が止めに入れば、逆に暴対法でお咎めを食らう。

「世の中どうなっただ：警察、仕事しろよ…」

額に落ちてくる髪をかきあげてブツブツとぼやく。

『そう落ち込むな。明日おめえが勝てば万事解決だ』

励ましのなか、実益があるのか。更に詳しく話を聞き出そうとした瞬間、腕ごと携帯を取り上げられて背後からばさりと黒髪が落ちてきた。

「っ、てめえ、何の用…！」

振り向く間もなく口を押さえられる。氷のように冷ややかな手の温度は紛れもなく狭山のものだ。だが聞こえてきた声音は別人かと思っほど研ぎ澄まされていた。

「襲名おめでとさん。昔のよしみで一応言つといたるわ。白頭鷲が動いとるで」

一体、何を言っているのか意味がわからない。だから深見に対して言っているのではなく

『…なんでおめえが狂犬と』

狭山の手ですぐさま耳元に戻された携帯から呆然とした郷田の声が聞こえてくる。

知り合いなのだろう。狭山の発言から考えても郷田の反応を見ても。だが決して良好な関係には見えない。背後にいる狭山は剣呑な雰囲気放っている。

口と腕から冷たい手が離される。いや、離れたというよりも力を失って滑り落ちたといった方が正しい。身体ごと凭れかかってきて自然と前屈みに押しつぶされる。

「重い、どけ！」

ぐっつと背を反らして追い払おうとした。

が、逆に顔を挟まれて強制的に上を向かされる。

この体勢はマズイ。何か嫌な予感がする。蛍光灯の明かりに目を眇め、被さってきた影に対して拳を握った。

けれど条件反射で動きが止まる。

「アキさんは俺が買った。そやから俺のモンや」

ドロリと濁った瞳が弧を描く。おぞましい、気持ち悪いと思えども身動きできない理由は何故か。

狭山は彗に似ている。外見ではなく、内面が。

（子供だ）

珍しいもの、便利なものを手に入れたがる子供。

人との関係を人として築けない不器用な生き物。

冷たい両手が首に回されてヒクリと喉が鳴った。

距離が縮まり、禍々しく歪んだ笑顔はもう見えない。

唇が触れる。すかさず入り込んできた舌にハツと我に返る。

またもや流された。いや、それ以前に電話中だ。

目の前にある喉仏を視線で押し潰さんばかりに睨みつけながら、ひとまず耳に押し当てた携帯を離そうとして、

「んうっ!？」

唐突に股間を触られて思わず声が出た。

さあっと血の気の引く音がする。静まり返った受話器からは咳払いすら聞こえてこない。だが聞こえてしまっただろう。そして深見が現在、どんな目に遭っているか見当違いな憶測を立てているに違いない。

怒りで真っ赤に染まった頭の中でミシリ、と何かが軋みを上げる。てつきり己の脳みその血管が怒りのあまりに張り裂けそうになった音かと思っていたが、実際に現実で鳴り響いた物音であつたらしい。『………… おめえがソツチの趣味だとは思わなかった。明日の22時に迎えに行く。盆採決が終わったら尋問だ。どういう了見かしつかり聞かせてもらおうじゃあねえか』

地獄の底に住んでいるものすらも震撼させるような低音が耳に届いた。やはり魔王はレベルが違う。深見が予想した見当違いな憶測のはるか向こう側、偏見に満ちたホモが住み暮らす未知の領域からの観点で盛大に勘違いをしているようだ。

『フェイに手え出してたら叩き割る。遺言用意して念入りに頭洗っ

て出て来い』

「んうううううっ！」

叫びも虚しく電話は切れた。ツーツーという無情な電子音が胸に染み渡り、絶望から生じる虚脱感で全身から力が抜け落ちる。

やはり厄日。それも10年に一度あるかないかの厄日だ。ホモにホモだと思われた時点で晴天の霹靂、思いつきり現場を押さえられた段階で強制スライダービングの心持ちであつたのに、よりにもよって魔王の怒りを買った。しかも彗とできているという末期的な子煩悩親父の思考回路に基づく怒りだ。どんな言い訳をしようとも疑いを晴らすことなどではしない。

深見にも理解できる心理だ。昔はともかく今はすっかり一児の父である。もしも娘が浮気しまくりのタラシ男と同棲していて、尚且つ金も無心されて、その上浮気の拳句にできた男の子供の面倒まで見させられていたら生かしてはおけない。話を聞いたその日のうちに殺りに行く。郷田の心境は今、正にそんな感じなのだろう。

よって最低な勘違いだが怒りは湧かない。だが命を購える方法も思いつかない。何をどう処理すべきなのか、あまりのショックで頭が真っ白だ。

だがそれでも思った。ひとまず狭山は消しておくべきだ。

携帯をテーブルの上に投げ捨てて両の拳で狭山のこめかみを挟む。ゴリゴリと容赦なく挟ってやれば、苦しげな鼻息が顎に吹きかかった。

「ん、ん、んっ！」

痛そうだ。痛いだろう。絶対に痛い。

それなのに唇を離そうとしないのは何故なのか。どうして無遠慮に人の股間を揉みしだいているのか。

答えは狭山が変態だからだ。

（俺は変態じゃねえ！だから治まれ、バカムスコー！）

イスの上に上げっぱなしだった両足を床に下ろして、下へ下へと腰をずり下げる。狭山の手から逃れるためだ。

深見のムスコは本当にバカになっているらしい。どうしようもない性欲塗れのド腐れ中年が相手だというのに、触られて先ほどのキスよりも強い反応を見せていた。

乱暴だが力加減のわかった手つきにジワジワと腰が疼いて押し寄せる快感の波に飲み込まれそうになる。

足りない。服の上からではなく直に触る方がいい。

だが相手は男で、しかも狭山だ。

顔は見えなくとも上下する喉仏の隣に長い黒髪が揺れている。こんな長い髪をした男など滅多にいない。

だから、狭山だ。

強く思い、口の中を荒らす舌を力一杯噛み締めた。

「っ、ひつたいにあっ！！あにしゅんえん！」

「コツチのセリフだ！」

口の中に広がる鉄の味に吐き気を覚えつつ間髪いれずに立ち上がった。狭山は髪を振り乱しながら退いて、涙を浮かべながら口元とこめかみを押さえている。

「人の電話に勝手に出て、人の身体を無許可で撫で繰り回して、拳の果てには生死に関わるような誤解を振り撒きやがって…相手がためえじゃなかったら裸に剥いて縛り上げてから路上に転がしてんぞ！」

「にゃんえ、やあんえん？」

「んなもん、ためえが変態だからに決まってるだろ！なんで嫌がらせなのに相手が喜びそうなことやってやらなきやいけねえんだ！だいたいてめえの素っ裸なんざ繁華街の電柱にぶっ掛けられた嘔吐物並みの有害画像じゃねえか！近所迷惑考えてトイレに行け！便器に飛び込んで流される！」

「ひくらあんえも、ほこまえいわえたにやいわ！あいあい、あんたおおなひいんふにやないか！」

「一緒にすんな！俺はホモじゃねえ、女一筋の健全な男だ！！」

「ほあえて、ふあっほるあなひか！」

「掘られてか揉まれてかどっちだ！？どっちにしても愚息の不本意な暴走だ！つか、なんで会話成立してんだ！マトモに喋れ！！」

イスを挟んで向き合い、互いに互いの胸倉を掴んだ。狭山はモゴモゴと口を動かしながら、深見は奥歯を噛み締めて、バチバチと火花が飛び散りそうな目で睨み合う。

「くひんあか、ひいはまっほんえん！」

「知るか！飲め！そこらへんに吐いたら舐め取らせるぞ！！」

「おんあへひひふあえん！いえあんほうふは！！」

「いえあんって誰だ！人名はさすがに理解できねえ！さっさと口ゆすげ！！」

深見は狭山の襟首を引っ張って真横にある流し台に近づいた。後頭部を押さえて水道の蛇口を捻ってやれば素直にグジュグジュと口を濯ぎ出す。

「あー…まずかった。久しぶりに血反吐舐めたわ。今日はホンマにバイオレンスデーや」

赤い血に染まった水を数回吐き出してザバザバと顔も洗った狭山は、着ている黒いロングTシャツをたくし上げて顔を拭こうとしながら気だるげに言った。

タオルを要求する様子は微塵も感じられない。遠慮ではなく普段からそうしているような自然な動作だった。

「…使え」

見かねて流しの下に引っ掛けてあったタオルを差し出した。

狭山は一瞬、驚いたように目を見開き、すぐさまニンマリと妖しげな笑みを浮かべた。

「ホンマに世話焼きやな」

誰かから聞いたような口ぶりは気になったが、それよりも前髪や顎から垂れ落ちて黒いTシャツに染みを作っている水滴の方が気になった。暖房を入れているとは言えども冬場なのに寒くないのか。せつかく差し出してやっているタオルが無意味だ。水も滴るいい女には惹かれるが水の滴る変態中年には不快感しか覚えない。

「わっぷ！」

ニマニマと笑みを浮かべ続ける顔にタオルを押しつけた。掌で顔を驚掴みにするようにしてゴシゴシと擦る。「痛い」だの「もうちょい丁寧」だのという言葉が聞こえた気はしたが、無視してしっかり水気を拭き取った。

少しはキレイになったかどうかと若干の期待を抱きつつタオルを剥がしてみたが、露になった狭山の顔は変わらずに胡散臭い中年のままだった。

胡散臭い。だからこそ余計に気になる。先ほどの郷田との会話、深見の性格をよく知っているような口ぶり、そういえば貞清の小さい頃を知っているとも言っていた。

一体、狭山は何者なのか。深見は片手にタオルをぶら下げて、眼鏡を掛けなおしている横顔をじっと睨みつけた。

視線に気付いたのか、狭山は洗面で深見に向き直って顔に手を伸ばしてきた。

「アンタ、そういう顔してたらホンマにヤクザやな。普通にしたら男前やのに…もったいな」

「ほっとけ。触んな。それよりさっさと帰れ」

ヤクザも男前も普通にしていればも昔から言われ慣れている言葉だ。深見は手にしたタオルで伸ばされた手を叩き、玄関を顎でしゃくった。

「なんや、凶刃情報はもういらんのか？」

「郷田のおっさんから聞いた。今じゃてめえの方が危険人物だ」

帰れと言っているのにイスに座った狭山を睨み下ろして腕を組む。凶刃の情報を知リたかったのは組の安全を確保するためだ。盆採決が決まった今では何の用件もない。

「そやけどムリヤリには追い出そうとせえへんな。なんでやねん？」

「…スーパードのケンカ、覚えてねえのか」

自分で言うのは腹が裂けそうなほど苛立ったが、揺らぎようのない事実だ。狭山の腕っ節は深見よりも上をいつている。力づくで追

い出そうとすれば、またもやセクハラを受けそうな予感をヒシヒシと感じる。

「そやけど身体は正直に反応しとるで」

思った傍からセクハラだ。狭山は、ほとんど通常サイズに戻った深見の股間を指差して当然のように言ってきた。

「人の股座を堂々と指差すな」

深見はゴキブリを見た時と同じ表情で狭山の黒ずんだ指先にタオルを被せた。ある意味、希少価値の高いゴキブリだ。指を指されただけで腹の中まで汚されている気分になる。

「せっかく責任取ったるて言うとなのに」

「んなもんいらねえ」

「ほな、なんでそないに世話焼いてくれんねん？」

「標準装備だ。てめえだからどうこうってわけじゃねえ」

「飯代出したやん」

「……だったらさっさと食って帰れ」

「舌が痛くて熱いの食われへん。他のモンで払ってや」

「………1万ちよつとの金で俺を買っ気か」

「ええ？そりやないやろ」

狭山は足を組み、左手でタオルをクルクルと回しながら首を傾けて反吐が出そうな笑みを向けてきた。

何を言おうとしているのか　直感で理解してドクリと心臓が荒ぶる。

「一千万や。慈善事業した気はないで。断るんやったら今すぐ耳揃えて払ってもら……」

「そんな金はねえ。身体で払ってやるから二度と顔見せんな」

少し声が震えていたかもしれない。けれど真っ向から見据えた。そして即座に踵を返した。

向かう先は寝室だ。もうどうだっていい。深見は心の底から狭山を軽蔑した。

慈善事業だとは思っていなかった。だが心のどこかで助けられたのだと思ってきた。狭山でなくても、鬼仏の差し金でもなんでもいい。一千万の大金を自分の為に支払ってくれた誰かがいた。それだけで十分だと　独りではないのだと、思えていたのに。

薄暗い寝室に足を踏み込む。今朝見たのと形が変わっている布団をベッドの上から蹴り落とす。ベルトを抜いて、シャツのボタンを外し、蹴落とした布団の上に両方投げつけた。

娘と共に眠るために用意したのに、今はこの時のために詠えたようなダブルサイズの大きなベッドを見下ろして自らの左肩に爪を立てる。

5年前、背中に刻まれた絵柄は昇り竜。父の仇名と同じ、雲を突き抜けて天を泳がんとする気高き竜の顔が左肩にある。

「気に入らんか」

背後から掛かった声に半身を向けて振り返った。

「気に入らんわな。5年間、来んかったぐらいやし」

逆光を背負った狭山の表情は見えない。

「そもそもあんたが望んで彫ったわけやないし…」

フラリ、と身体を揺らして近づいてくる。

「あんたを買ったて言えた義理もないねん」

深見の真横を見向きもせずに通り過ぎ、腰を屈めて布団の上に投げ捨てたシャツを拾い上げる。

「なんや、迷とるように見えたと諸事情で調子に乗ったわ」

シャツを差し出してくる狭山は笑みを浮かべていた。

「ゴメンな。背中に傷つけてもうて」

それは口元だけ笑った、歪な笑みだった。

狭山は立ち竦む深見へと強引にシャツを手渡して寝室を出て行った。しばらくして玄関からドアの開閉音が聞こえたのでおそらくどこぞへと帰って行ったのだろう。

深見は狭山が立ち去った後もシャツを握り締めたまま、ぼんやり

と寝室の真ん中に佇んでいた。

何をどう思えばいいのか、よくわからない。

狭山は疑問ばかり撒き散らしていった。

けれど深見に影響を及ぼすものはない。

当初の目的も狭山の力を借りるまでもなく解決した。

だから狭山は単に飯代を出して深見にセクハラをして、寝室で眠ってから再度セクハラをして帰っただけだ。

最初から謝ることが目的だったのではないか、など。

自身が作り出した都合のいい妄想でしかない。

（だったらなんで、あんな…）

辛そうな顔をして謝ったのか。

（やってねえイカサマ、認めたみてえな）

唯一、揺るがない誇りを自分の手で汚したような。

（傷、なのか？）

爪痕のついた左肩をそつと撫でる。

色のない未完の昇り竜。

色を得れば刺青になるのだろうか？

「傷は、傷のままだろ」

誰に言い聞かせるでもなく呟き、左手に握り締めたシャツを羽織って台所に向かう。シチューを火に掛けたままだったことを思い出したのだ。

「そういう気は回せんのか…」

手遅れになっっているかと思いきや、いつの間にか狭山がコンロの火を消していたらしい。寸胴の蓋を開ければ食欲をそそるホワイトソースの香りが立ち昇ってきた。

一応、底をさらって焦げていないか確認しておこうと調理器具の掛けられているタイルの壁を見回したが、洗って元に戻したはずのお玉がいつもの定位置から失せている。

ふと流しを見下ろすと使用済みのお玉が転がっていた。

「…食ったなら洗って帰りやがれ」

深見はお玉の赤い取っ手を持ち上げて、白く汚れた銀色の半円を睨みつけながら仏頂面で悪態を吐いた。

緊張が緩んだのか、単に寝不足だったのか。シチューが無事だと判明してからすぐに強烈な眠気が襲ってきた。

だから、たしか、おそらく寝たと思う。

よって、きっと、未だに夢の中だ。

深見はうつ伏せになって枕に顔を半分埋めたまま、目の前に化けて出た図太い怪奇現象を眺めていた。

深見から掛け布団を奪い取り、しかも自らに被せるのではなく抱き枕にして、己の身体には掛け布団の下に挟んでいた毛布を巻きつけて、しっかりちゃっかり暖を取っているという不遜極まりない悪霊。

性別は男だ。適度な距離感で配置された平均的な目鼻立ちをしている。可もなく不可もなく、兎にも角にも特徴がない。

だから後付けされた特徴で印象が決まる。

記憶にある姿は脱色した栗色の髪の毛で緩やかなパーマなんぞもかけており、いかにも金持ちのボンボン、キャンパスライフを楽しんでいそうな私大生という印象だった。

今は黒髪を短く切ってサラリーマン風になっている。どこにでもいそうなサラリーマンだ。毎日満員電車で揺られて会社に向かい、会社に着けば営業に向かい、成績も仕事内容も可もなく不可もなく。愛想だけが取り柄です、といった人の良さそうな笑顔の似合う好青年。

を、演じている天才ペテン師。

(……………脳みそ)

深見は混濁した頭で考えた。

コイツの脳みそを貞清に詰め替えなければ。

この悪霊は常人の数十倍、出来のいい脳みそを搭載している。中学時代から六法全書を丸暗記しており、どんな言語でも3日で習得することができた。数百社にも及ぶ株価の値段を毎朝、経済新聞を一読するだけで一桁も違わずに更新して、尚且つ弁舌にも優れているので独自の情報網を持つており、政財界にも顔が利いたりする。麻薬売買なんかに手を染めずとも株式売買だけで総資産数十億、携帯とパソコンを使って表に姿を晒すことなく指先一つで巨万の富を築き上げていた。

慧だ。

深見の隣に転がり両眼を閉じて、すひよすひよと間の抜けた寝息を立てている。相変わらず顔色が悪い。地獄に行っても酒ばかりで食っていないのか。

枕の下から腕を引き抜き、そつと頭を撫でる。

ツルツルとした毛並みが指の間をすり抜けた。平均的な容姿をしている慧だが髪だけは飛び抜けて上物らしい。美容師を生業にしている沙織が昔、鼻息荒く力説していた。

（頭に全部、栄養…）

吸い取られていると言ったのは誰だったか。

（そんなのいらねえって、）

言った記憶がある。

（…背中、と左腕…腹、右の太腿…左足首）

挟れた、爛れた、裂かれた、内臓を蝕む古傷。

（治れて…死んで、治ったか…？）

聞きたいが声を発するのが億劫だ。とりあえず呑気に寝ているのが癢に障ったので肉の薄い頬を摘んで持ち上げた。

「…めえりやう…みゃいりあ…うえ…」

相変わらず変な寝言だ。理解不能だが嫌がついているらしいことはわかる。慧は眉根を寄せて、ペシペシと手の甲で深見の手首を叩いている。

この寒い中、人の布団を拉致しておいて不服そうな態度を取ると

はいい度胸だ。深見は頭を枕の上に這いずらせて彗の傍ににじり寄った。

すっかりと両腕両足で抱えこまれて、枕代わりにまで使用されている掛け布団と彗の腹の間に手を差し込む。

「う…てい、りええ…！らあご、みぐい…い…！」

強く引つ張ると、彗は子供が嫌々をするように首を振って必死に布団へしがみついた。

こんな時だけ子供じみた振る舞いをするとは小賢しい。そんなぶりつ子が効くのはどこぞの魔王だけだ。容赦なくグイグイと引つ張って布団を取り戻す。

一緒に引つ張られた彗の頭が少しだけ宙に浮いて、ボスリと勢いよく布団の上に落ちた。

「ふ…ふええ…っ、ちあうい、ふい…！」

嘔泣きか。嘔泣きだ。すっかりと閉じられた目頭にじわりと涙が滲んでいる。両手が迷子のようにフワフワと空中を彷徨い、深見のシャツに触れた途端、しっかと握って身体ごと胸元に移住してきた。寒いのか、取り上げられた布団を探しているのか、しがみつける物なら何でもいいのか、まったくもってわからない。

深見は三白眼を眇めた凶悪な目つきで胸元に寄せられた彗の頭を見下ろし、光沢のある黒髪を鷲掴みにした。

「めえ…あ…？」

見上げてくる彗の、涙の滲んだ眼がうつすらと開く。頭を仰け反らせているためか、口も少し開いている。

（日本語喋れ）

脳内で喋りかけてキスをした。桐生スタートじゃないし彗の姿も何か違うような気はするが、どうせいつもの夢だ。

夢でならホモだとかインポだとか考えずに済む。とりあえず勃つものは勃っているし、現実でやれないのだからせめて夢の中でくらいやるだけやっておいた方が得だ。

ぼんやりと霞む意識を奮い立たせて舌を入れた。彗は応じること

もなく不思議そうな顔で瞬きをしている。

1、2、3…となんとなく瞬きの回数を数えて、カウントが5に達した瞬間、

「…あ」

慧の両眼がブワリと大きく見開かれた。そして何故だか驚異的なスピードで、薄暗い部屋の中でも見て取れるくらいに顔が真っ赤に染まっていく。

「ん、ん、んっ…んぬうあにしてんによっ!？」

慧は奇声を上げながら深見の頭を押しつけて、締められていたバネが伸びるように勢いよく飛び起きた。

「ちあう、ちえいうか、んあに、なに、にやに!？」

日本語のような気もするが、やはり意味はわからない。だいたい深見は超がつくほどの低血圧なのだ。キチンと寝た後の起き抜けは例え夢の中であつても、ろくに頭が回らないし機嫌が悪い。慧のテノールボイスで喚かれると身体の中でドラを鳴らされているような気分になる。

よって塞ぐべきだ。襟首を掴んで引き寄せた。

「ちよっ…あー、あー、あーっ!舌キモいデイープキス最初に考え出した人間は歴史上から消えればいいってそれどころじゃないカンジ?いや待って俺なんだけどアキよく見て俺は男ってそれくらいわかってると思うからアキ冷静になってもらっても寝惚けてるから寝惚けてるってことは話を通じない状態ってことで俺ひょっとしてこのまま襲われたりするの断固拒否します、起きて!」

腕を突っ張って必死に堪えている。堪えるからうるさいのだろうと、力を抜かせるためにわき腹へと手を伸ばした。

「や、なっ、やあ、ひやはっ、ひやはははっ!」

騒がしさが倍増した。本当にウザい。夢枕には静かに立つべきだ。人の身体の上に乗っかってジタバタ暴れる幽霊は今すぐ地獄に舞い戻れ、とベッドの上から蹴り出すことにする。

「いたっ、何、なんでそんなに乱暴なの!?!約4年半ぶりに死んだ

はずのパトロンが帰ってきたのに何この扱い、酷すぎる！前々から思ってたけどアキって薄情すぎない？」

「……うるせえ」

あまりにもうるさいので渋々口を使つてやった。しっしつと犬猫を追い払うようにして手を振り、布団の中に潜り込む。

だが至福の二度寝タイムは妨げられた。

「なにそれ、ホントにサイテーなんだけど。アキって昔からそうだよね。自己中心的、唯我独尊、自分がよければそれでいいっていうか総合的に無責任。ダメンス極まつてるよ、ダメンスにダメンスって軽蔑されるくらいにダメンスだと思う。桐生のこと弄んだし、さおりんにも手出しして、子育ても金も全部俺任せでフラフラ遊びまわつてさあ、今になって改心したところで償えるはずないじゃない償うつていうなら今まで俺がアキに投資してあげたお金、4千7百飛んで5万9千8百65円、全額返してもらえない？」

頭まで布団を被り、亀のようになつた深見を揺さぶり、蹴りつけて背中の上に乗り上げた挙句、頭の辺りをバンバン叩きながらベラベラと喋り倒している。

深見は布団内に持ち込んだ枕に頭を埋めてギリギリと歯軋りをした。一体てめえはいくつだ、満26歳だ、と自問自答して同い年であることを恥じる。

彗が今、深見を起こそうとしているのは「お父さん遊んでー」の心理に基づいている。つまり駄々を捏ねる休日の小学生だ。お父さんが普段どれだけ働いているか、学ぶことなく育つたのだろう。まったく躰がなっていない。郷田が甘やかしたせいであつた。だから知つたことではない。家庭の事情は家庭内で解決するべきだ。

深見は布団を巻き込んで更に強固に丸くなつた。

だが背中に跨つた彗は一向に降りる気配を見せない。

「アキ、アキ、アキつてば。ねえ起きてよ。ホントに起きて。言つとくけど俺、足ついてるからね。若干アッチの世界に旅立ってただと脱走して完全復活。喜んでくれないの？」

「……………」

「アーキー、アキ、アキ、アキー、あ、そうだ。アキ、お土産あるよ。酒持ってきたよ。早く起きないと俺が全部呑んじゃうよ。もう半分しか残ってない。せつかく一緒に呑もうと思っただけだよ。俺はアキ、ずっと起きないし。いつから寝てるの？寝不足なの？俺は17時に来たよ。今は21時。暇だから色々家の中漁ったけど怒らないでね。だってアキが起きなくて暇だったから。しょうがないよね。何回も起こしたのに起きないし」

拗ねた口調がうつとおしい。バシバシと布団を叩き続けるのもやめようとしな。おかげで徐々に頭が冴えてきた。

煙草を求めて布団の中から手を出す。彗は長年のつきあいからか慣れたもので、あっさりと深見の上から立ち去り、出された手に口グピースのソフトパッケージを握らせた。

そうして布団から顔を覗かせた深見へと凶太い事後報告を重ねてくる。

「シチューおいしかった。ちょっと食べた。風呂も入った。服は適当に借りた。あ、それとゲームしてた。桃鉄。セーブデータ、俺用の作ったから消さないでね」

何か腹の内がムカムカする。言いたいことがあるような。だが頭が未だにハッキリしない。ベッドに隣接する壁に寄りかかりながら、どうにかこうにか身体を起こした。

壁に凭れて両手両足を投げ出している深見は一見、ラリっている真つ最中の麻薬中毒者のような風体で濁りきった目をぼんやりと彗に向けている。相当な、それこそ郷田に匹敵するほどの人相の悪さだが、本家本元を幼い頃から見慣れている彗は露ほども怯まない。

ニコニコと背景に新緑が似合いそうな、本人の内面とは真逆の属性を持つセイントスマイルを浮かべて深見の手の中から煙草を引き取り、ベッドサイドの棚からアルミの灰皿を取り上げて深見の両足の間、紺色のシーツの上に直接置いた。

そうして引き取った煙草を自身で銜えて火を点した後、

「はい、どうぞ。ゆっくり吸ってくださいねー」

まるで介護ヘルパーのような口調で語りかけつつ、深見の口に煙草を差し込んだ。

言われたとおり、ゆっくりと吸い付く。重たい煙が肺の中に満たされてモヤモヤと霧のように拡散していた意識が徐々に本来の形を取り戻していく。

丸々一本を吸い尽くす頃になってどうにか目が覚めた、といえる状態になった。まだイマイチ本稼動には至っていないものの、目の前で起こっている怪奇現象が夢でないことぐらいはわかる。

（スーの幽霊が見える）

煙草を吸いながら胡座を掻いて一升瓶を傾けている。

あまりに自然な姿で拍子抜けした。顔色は悪いが焼け死んだ割には健康そうだ。何か他にも紛れ込んでいるのではないかと辺りを見回して周囲を確認したが、寝室に入り込んだ人外はひとまず彗だけのようだ。特に変わった様子もない。

改めて見た寝室の中は暗かった。ブラインドから射し込んでいる光は自然のものではなく白とオレンジの電灯だ。寝る前にも降り続いていた雨音はいつの間にか止んでいて、隣のリビングからドア越しにテレビの音が聞こえてくる。

何時だ、と腕時計を眺めると夜9時を少し回っていた。うたた寝のつもりが結構な時間、眠っていたらしい。前夜の寝不足が影響しているのだろうか？頭がズキズキと痛い。

呑み耽る彗の姿をなんともなしに見ていたら、

「はい」

彗は満面の笑顔で一升瓶を差し出してきた。

「目覚めて一分もしねえうちに酒呑む趣味はねえ」

深見は彗の顔と一升瓶のラベルを見比べて、掠れた声音で断った。起き抜け早々に芋焼酎、しかもラベルに描かれている銘柄は魔王である。

何故そのチョイスなのか。深見が郷田を恐れていることをわかつ

ていて、この酒瓶を見る度に郷田のことを思い出すよう仕向けたいのだろう。早い話が嫌がらせだ。

「じゃあ全部、俺が吞んでいい？」

「土産じゃねえのか」

「いらないうつていうから」

「今はいらねえ。今度吞む」

「今、吞もうよ。飲み物取りに行くの面倒じゃない？」

「酒は水じゃねえ」

アル中の考えには付き合いきれない、とベッドから降りる。重々しい足取りで壁伝いによたよたとドアへ向かった。

夕方、深見が寝ている間に幼稚園から戻ってきたであろう娘の様子に気がなったからだ。おそらく隣のリビングでテレビを見ているのだろうとドアを開けて

「…ラップ現象か…」

深見は額を押さえてその場にしゃがみこんだ。

リビングは荒れ果てていた。引出しという引出しが開け尽くされて空き巣に入られた直後のように物が散乱している。電気、テレビ、暖房が点けっぱなしでゲームとパソコンの電源も入ったままになっていた。

しかも娘の姿がない。

この事態を怖がってどこかに隠れているのだろうと、どうにか氣力を奮い、立ち上がって台所に向かえばダイニングテーブルの上に食べかけのシチューが放置してある。

ペットボトルに入った作りおきのお茶も出しっぱなしでコップにも半分ほど飲みさしが残っており、その隣には誰が作ったのか、チラシで作られた不恰好な折鶴らしきものが積み上げられている。材料になったと思われる冷蔵庫の隣に積んであったチラシの束は解かれて崩れて床に散乱していた。

そして調理場を見れば寸胴の蓋は開けっ放し、流しには4・5本の吸殻がど真ん中に鎮座していて茶色い汁が排水溝に向けて滴って

いる。

深見はダイニングテーブルの上に両手をついて頂垂れた。

「……スー」

「アキが起きないのが悪い。けどちょっと散らかしすぎた感があるからご飯の支度してあげる。それで許してよ」

背後から悪びれない声が聞こえる。

突然現れたわけじゃない。彗は深見の後ろをテクテクとついてきていた。ちゃんと足音もしている。浮いたり消えたり壁をすり抜けたりもしていない。

生きている。だって温かった。

寝惚けていた間の記憶が一息に甦って頭痛が更に強まった。魔王に知れたら頭蓋骨を粉碎される。彗はどんな風に姿が変わるうとも彗である。ベロチューに対する報復の手段として喜び勇んで郷田に報告するだろう。

（いや、その前になんでスーは生きてんだ？）

実は海外に逃げ果せていたのだらうか？だとすれば郷田の証言はなんだったのか。生きているなら一言、もっと早い段階で知らせて欲しかった。貞清だって落ち込んでいる。

生存を伏せざるを得ない理由があったのか。

そもそも何をしにここに現れた？

そして、娘の姿が見えないのは何故か。

様々な疑問が次から次へと生まれる。ダイニングテーブルのイスに座り、深見は一頻り頭を悩ませた。

けれど頭が痛くて考えがまとまらない。

何故、こんなに頭痛がするのか。

額を押さえてテーブルに両肘をついた。

背後からコトコトとシチューを温める音がする。

頭の痛みだけでなく全身が異様な気だるさに包まれている。とりあえず喉が渴いていたので、新しく出されたコップで生温くなった

お茶を飲んでいたら、

「はい、できた。食べたら風呂入ってね」

ニツコリと優等生じみた笑みを浮かべて慧がシチューの入った皿を差し出してきた。食欲のそそる匂いではあるが頭が痛くてろくに食べられそうにない。

「…頭がいてえ。てめえ、何した？」

深見は掠れた声で唸り、机を挟んで正面の席に座った慧を睨みつけた。様々な疑問の根源は慧だ。頭の痛みも慧に関係していると思えるのが妥当だろう。

「水分と栄養が足りてないからじゃない？食べたら元気になると思うよ。それでも治らなかつたら薬飲んだら？」

慧はテーブルに頬杖をつき、笑みを浮かべている。

「…遥はどこ行つた？」

深見は慧から視線を逸らさずに一番気に掛かっている娘の行方を問い掛けた。

しかし、まったく別の話題が投げ掛けられる。

「あ、そうそう。アキ、今日がいつだかわかつてる？」

あからさまな、意図した隠し事の匂いに深見は苛立った。

「先に俺の質問に答えろ！遥はどこ行つた！？」

「ははっ、やっぱりわかつてない」

カラカラに乾いた笑い声　感情のない笑みを湛えて慧は種明かしをするように両手を広げる。

「アキ、今日は盆採決の日だよ」

「…何言つてんだ」

「アキつてば、起きないんだもん。俺にクスリ嗅がされて」

慧はいかにも困った、という様子で肩を竦めた。

「ねえ、アキ。改めて自己紹介しようか。俺の今の名前は呉^{ウー・ファン・ドン}灯つて言つてね…」

薄い頬が釣り上がる。特徴のない顔が豹変する。

香りたつ狂気じみた匂いにこめかみから嫌な汗が滲む。

「中国マフィア、導刃^{ダオレン}の2番目なんだ」
出来のいい仮面の下から現れたのは狡猾なペテン師。
「遙ちゃん是人質なんだよね。勝てない勝負に興味なくてさ」
次々と明かされた事実に愕然とする。
そんな深見を見て慧は声高に笑い声を立てた。

第一部・完

Red fraction 06 (後書き)

ご読了ありがとうございます。まだ何も始まっておりませんが、ひとまず第一部完結です。この後は狭山視点の1・5章に続きます。深見は少しばかり休憩。一連の事件の裏側をちょこちょことお届けしたいと思います。

遅筆な作品ではございますが、何卒、完結までお付き合い頂きたく……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7290p/>

Red fraction

2011年2月21日14時40分発行